



横芝光町 文化遺産ガイド

3



横芝光町教育委員会



はじめに

この3分冊目は、横芝光町の九十九里平野を廻ったもので、JR横芝駅から、駅前道路を東へ進み、栗山川を渡って旧光を廻り、白浜海岸まで行って、屋形海岸から返して北清水、鳥喰を經由して戻ってくる道筋を掲載した。

九十九里平野はほとんど平坦で、海岸まで行く途中は多少の高低差があって、水田と集落・山林が交互に現れ、平野の中でわずかな変化を形つくっている。わずかな高地は低地の微高地と呼ばれ、かつての砂州あるいは海岸砂丘で、低地は後背湿地で、沼地あるいは沼沢地となって今も残っている。微高地には海岸近くまで平安時代の遺跡があり、特に屋形には平安時代中期、平良兼が居館を構えたと言う伝承も真実味を帯びる。中世には白磯に板碑があり、このことから今から千年前には今日とほとんど変わらない地形となっていたと思われる。このように九十九里平野を歩いても古い遺跡が数多くあり、また、近代では平地の特性から開発が進んで、新しい遺跡も見ることができる。このような変化の少ない平野を散策して、新しい発見をするのも面白い。



目 次

はじめに

目次

一. 宮川橋場から古屋・桑郷	1
二. 西高野から谷中	9
三. 宮川入	14
四. 宮内・作間内	16
五. 上原・目篠・原方	20
六. 五ノ神	24
七. 長塚	27
八. 木戸十字路周辺	32
九. 木戸関・辻・白磯	36
十. 尾垂五・六区	42
十一. 尾垂イ・尾垂浜	47
十二. 白浜海岸	49
十三. 屋形立会・南川岸	51
十四. 屋形南・新島	54
十五. 屋形宮前・荒場・三本松	59
十六. 北清水	65
十七. 鳥喰	69
十八. 栗山・東町	74

おわりに



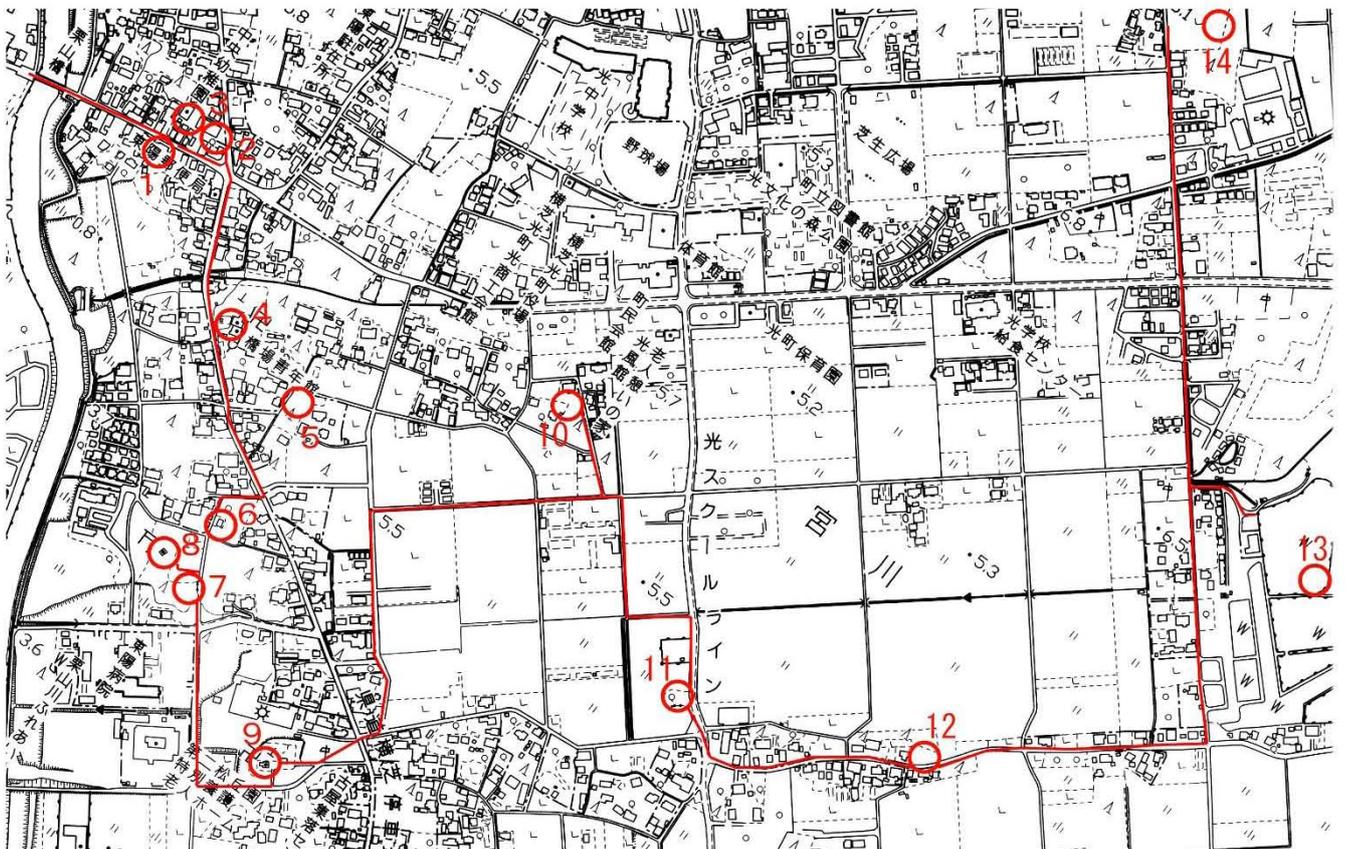
栗山川下流

一. 宮川橋場から古屋・桑郷

横芝駅前十字路から駅前通りを東へ行き、栗山橋を渡ると宮川橋場である。橋場はここがかつて栗山川を使つての船運の集積地であり、その積み下ろし場があったことからこの名が付いたと思われる。橋を渡った両側にはその名残の町屋が残るが、今は商いをしていない。そこを過ぎると橋場の十字路に当たり、この十字路を右に行くと海へ、左に行くと芝崎へ行く。東へまっすぐ行くと今の役場方面へ行くが、かつての道とは大きく変わって、今はこのあたりが町の中心となっている。



栗山橋から橋場を臨む



1. 橋場の旧商店街

栗山橋を渡って50mほど行くと、右側に古そうな商家の建物がある。木造の棟に表に格子窓があり、いかにも商店風であるが、その表に店の出入り口がない。この建物の奥に今も醤油店の家族が住んでおられて、家人の話では今の住まいの所にかつて醤油の醸造蔵があり、そこで醤油を製造し、表の店で販売していたと言う。今は表の店舗棟以外はその跡は残っていないと言う。

また、醤油店の向かいにやはり店舗であった家屋が建っている。もちろん今は商売をしていない。このお店もこの地域の中心となるお店で、かつては大変繁盛したようで、店舗の奥には蔵を構え、かなり資産家であった様である。醤油店を含め、この地区がかつては大変にぎわっていたことが、想像される。



旧醤油店舗



旧寝具店舗

2. 橋場十字路の赤レンガ倉庫

橋場の十字路の左側手前に、表の建物に隠れるように、赤レンガ倉庫が建っている。レンガは長手だけの段と小口の段とを交互に積むイギリス積みで、明治時代後半から大正時代に主に土木工事で採用された。と言うことは既に百年は経っている倉庫で、町の貴重な近代化遺産のひとつである。



赤煉瓦倉庫

3. 光中央幼稚園庭の大イヌ槇の木

橋場の十字路の左側にある赤煉瓦倉庫の裏がひかり中央幼稚園で、その庭の奥に大きなイヌ槇の木が植えられている。幹周りは3.2m、樹高は14.5m、樹齢500年と言われている老木である。近くでよく見ると、樹の中は空洞になっていて、ある時は中に大蛇が住んでいたという噂もある。しかし、今も樹勢は良く、夏は良い木陰となって園児たちを見守っている。



4. 宮川本郷の放光院

橋場の十字路を右へ曲がり、100mほど行くと左側に塀で囲まれたお寺と墓地がある。どちらかと言うと街中のお寺と墓地でやむ終えないが、その割りにお寺の本堂は粗末である。しかし、本堂の前にはお大師様を安置した小堂や、石造の大師像があり、大師信仰が盛んであったことが想像される。

小堂には木造のお大師様が安置され、その横の屋根をかけただけの石造のお大師様が3基於かされている。また、石造六地藏と阿弥陀様が一行に並び、七仏信仰がここでも認められる。

境内にはこの辺では珍しいオニグルミの樹が2本植えられていて、川に近い所で縄文からの名残かもしれない。

ひかり中央幼稚園の大イヌ槇



放光院前の七仏

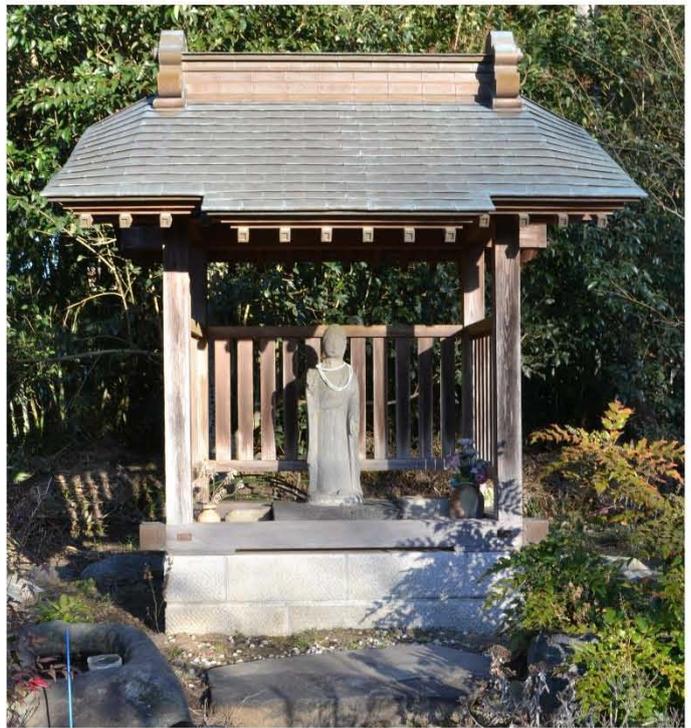
橋場放光院境内



放光院前の石造大師

5. 宮川本郷の阿弥陀様

放光院前からさらに南へ県道を50mほど行くと左に入る小道があり、それを行くとほぼ正面に屋根の架かった石仏が見えてくる。石仏は安山岩製の阿弥陀様の立像で、風化が進んでいて阿弥陀様の顔は不鮮明になっている。紀年名は彫ってなくいつ頃の作かは分からないが、江戸時代以前のもものと推定される。聞く所ではここにかつてはお寺があったということであるが、この石造阿弥陀様が本尊であったかは分からない。町内では石造阿弥陀様はこれ1基のみである。



本郷の石造阿弥陀様

6. 宮川尻川田の廻国塔

本郷の阿弥陀様からまた県道に戻って少し南へ行くと、右側に大樹が生える大きな屋敷の先を入り、道が左に曲がってすぐの所の左側に石塔が立っている。正面には「奉納大乘妙典六十六部日本回国」と彫られ、経典読誦と回国記念を兼ねた石碑と思われる。

7. 宮川尻川田の庚申塔

読誦塔の斜向かいに児童公園があり、その前に屋根が掛けられた青面金剛を彫った庚申塔が2基立っている。駒形と笠角柱形で、寛政十二(1800)年と宝永五(1709)の造立で、約100年の間をおいて立てられたものであるが、もう200年以上も経つとどちらが古いか一見では分からない。



尻川田の廻国塔



尻川田の庚申塔

8. 宮川玉崎神社

児童公園の奥に覆屋が架かった社が見え、これが宮川玉崎神社である。玉崎神社は上総一ノ宮の玉前神社を本宮とし、玉依姫(たまよりひめ)を祭神とする神社である。玉依姫は海神の娘で、豊玉姫(とよたまひめ)の妹でこの姫と邇邇芸命(ににぎのみこと)との間に生まれた鵜鷺草葺不合命(うがやふきのあえずのみこと)を養育し、後に后となって神武天皇(じんむてんのう)を生んだと記紀にある。おそらく弥生時代から海人族に信仰された神であり、その信仰の広がりには弥生文化の拡大と大いに関係していただろう。

玉崎神社の前には、町内では珍しい銭形の手水鉢がある。本殿の脇障子には、鯉の滝登りの彫刻が見事に彫られ、海神の神社にふさわしい。



玉崎神社正面



覆屋の掛った本殿



左脇障子の鯉の滝登り



銭形の手水鉢

9. 古屋薬王院福秀寺

尻川田の庚申塔前から道を南へ向かい、東陽病院の前を通り過ぎると広い道に出て左に曲がり、坂を上がると左側にお堂と墓地が見えてくる。ここが古屋薬王院福秀寺で、今は方三間堂とその後に鉄筋コンクリートの建物が立っている。同寺には県指定木造薬師如来立像が安置され、コンクリ製の建物の中に保管されている。本像は平成24年の修理のとき、胎内から平常秀名と承久元(1219)年の紀年銘を発見し、造立年と造立檀那が判明した。この薬師如来像は従来貞観様式の古いものと思われていたが、これを模した鎌倉時代の作であることが分り、仏像製作史に新たな知見が加えられた。また、本寺裏の墓地からは、20年以上前に縄文時代の石斧が出土し、ここが河岸段丘上の少し高い所で、すでに縄文時代には活動の場となっていたと思われる。



古屋薬王院福秀寺本堂



木造薬師如来立像



裏の墓地から出土した縄文時代磨製石斧



本堂に掛けられていた絵馬

10. 宮川浅間の馬頭観音

古屋薬王院から前の十字路を渡り、東へ入ってすぐ左に曲がって北へ進み、畑を過ぎて住宅地に入る所を右に曲がり、住宅地の東端の方へ入り、左の小さな山林の中に馬頭観音が立っている。この馬頭観音は頭に馬を彫った町内唯一の坐像で、明治12年造立の比較的新しいものである。しかし、なぜ今日の道から外れた所にあるのかというと、ここに元々橋場十字路から古屋折原へ行く道があった所で、後の耕地整理で道が全く改変されてしまって、この馬頭観音だけがそのまま取り残された。



浅間の馬頭観音

11. 古屋の天王様

馬頭観音から南へ出て田んぼの中を歩き、スクールラインを南へ行くと右側にこんもりとした木立のあるところが古屋の天王様である。ここには牛頭天王の社のほか、十九夜塔、地藏、子安観音などの石仏があり、一つの宗教的な広場であって、この前に馬頭観音からの道が通っていたと思われる。

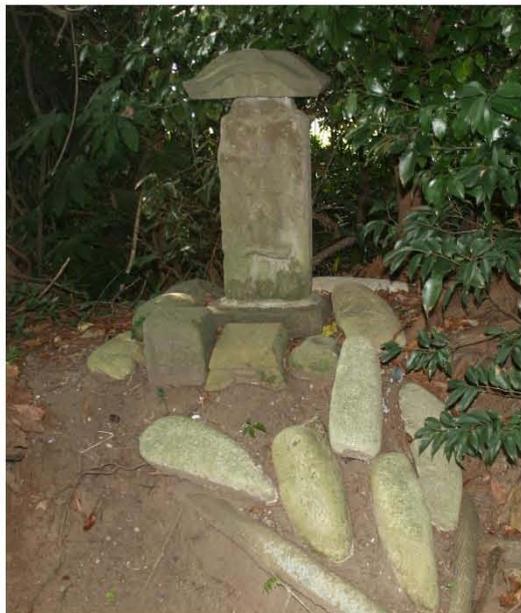


古屋天王様の杜



地藏と子安観音

十九夜塔と墓石



古屋折原の庚申塔

12. 古屋折原の庚申塔

古屋天王様からスクールラインを横切る道を東に行き、集落が切れる左側の茂みの中に折原の庚申塔が立っている。傘角柱形に青面金剛を彫った庚申塔の前には、飯岡石自然石に庚申と文字を彫った石が数基横たわっている。また、庚申塔の周りには、中世の五輪塔や宝篋印塔が置かれ、ここが庚申塚になっている。ここに中世石塔があるということは、この付近に中世遺跡がある証拠である。

13. 乾草沼

折原の庚申塔前の道をさらに東へ行くと用水路があり、その北奥に水面が見える。この奥が乾草沼と言われる所で、ある一時期養鰻場となっていたが、今はなくなって自然に帰ろうとしている。沼の東部の方はほぼ手付かずの状態に残っていて蓮が生え、夏には蓮の花が浄土を現すように咲き、様々な蜻蛉が飛び交い、湿原の自然を見ることができる。しかし、最近では外来生物の進入によって、本来の自然が脅かされている。



乾草沼の蝶トンボ



蓮華が咲く乾草沼

14. 三反田遺跡

乾草沼を右に見ながら北へ進み、役場前道路を渡りさらに行くと銚子連絡道路の建設現場に当たる。この辺りが三反田遺跡と呼ばれる縄文時代から平安時代の遺跡である。そしてこの当たった所の右側からは、古墳時代の住居跡が発掘調査で見つっている。低地での古墳時代住居跡は珍しく、その当時の低地進出のパイオニアの住居であったろう。



三反田遺跡の脇を通る建設中の銚子連絡道



昔、三反田遺跡から出土した縄文土器



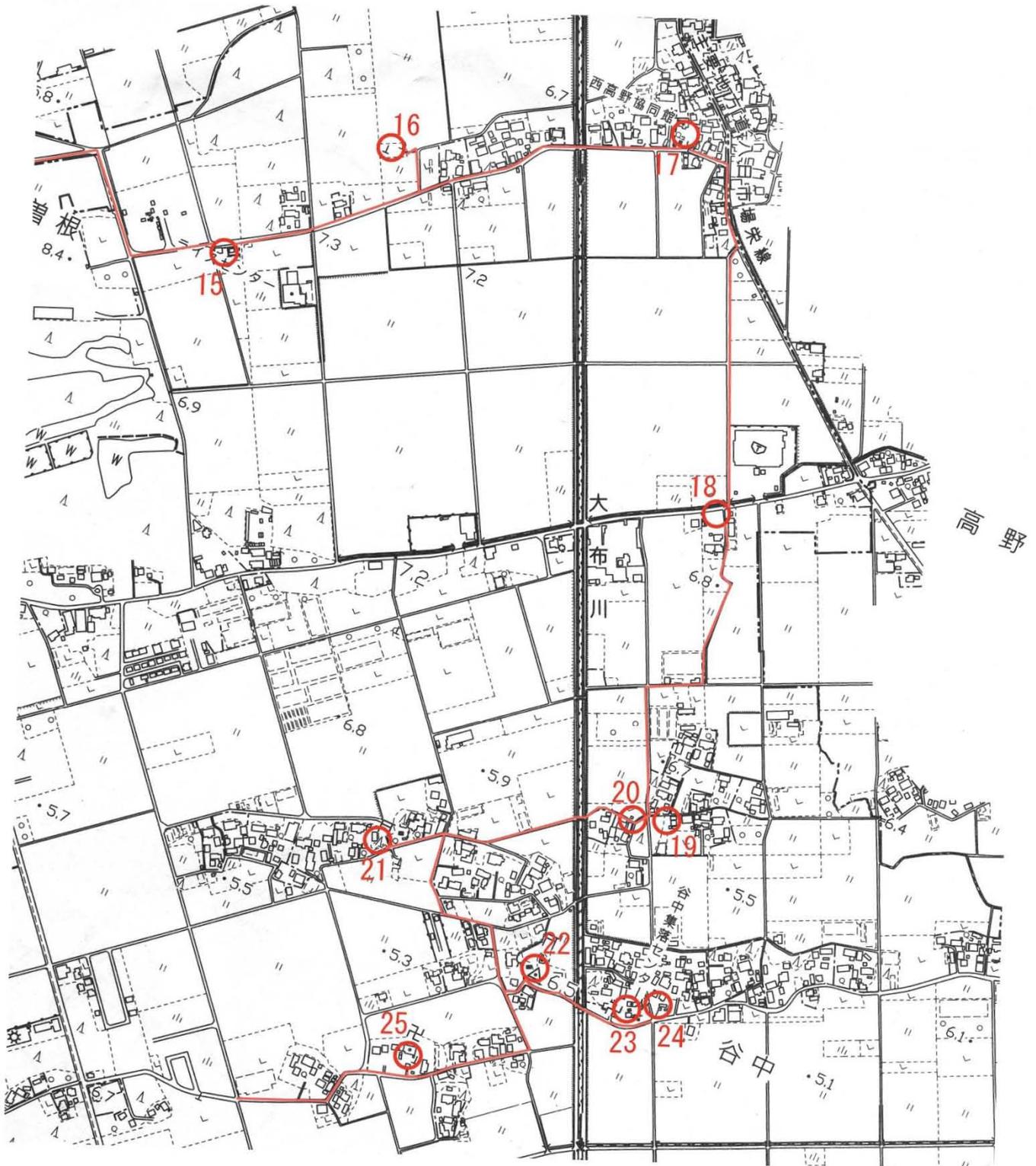
発掘された三反田遺跡



発掘で出土した縄文土器

二. 西高野から谷中

西高野は光地域の東端に当たるが、西が付くのは西高野に隣接する匝瑳市の西端が高野と呼ばれ、元々はその一部であったからであろう。谷中は西高野の南に位置する地域で、上の村、堀の内、輪の内などの集落からなり、これら九十九里平野に分布する集落は東西に長く伸びている。これら九十九里平野に分布する集落の殆んどは、砂州上に立地し、その砂州は東西に延びている。この砂州は九十九里平野が形成過程で、元々海岸砂丘であった所で、それが陸化する過程で何列も形成されたと思われる。つまり九十九里平野は砂州(砂堤)と後背湿地とが交互に東西に長く分布し、成り立っている。またこの砂州上に集落のみでなく、東西交通のルートとして、道筋がいくつも通っている。



15. 西高野はずれの石祠

役場前通りを東へ行き、クランクで曲がった先の右側に鳥居が立っている。中をのぞいてみると、石祠があるだけで、それには判読できる文字は無く、何の神様を祀っているか分からない。



石祠を祀った神社

16. 西高野馬場経塚

石祠の神社からさらに東へ行き、民家が立ち並ぶ手前を左に曲がると共同墓地がある。地籍ではここが経塚となっている。しかし今は真新しい墓石が立つ墓地のみが並んでいるだけで、経塚の痕跡は全く認められない。地名だけが残るが、周りは水田であり、はたしてここに経塚があったのだろうか。



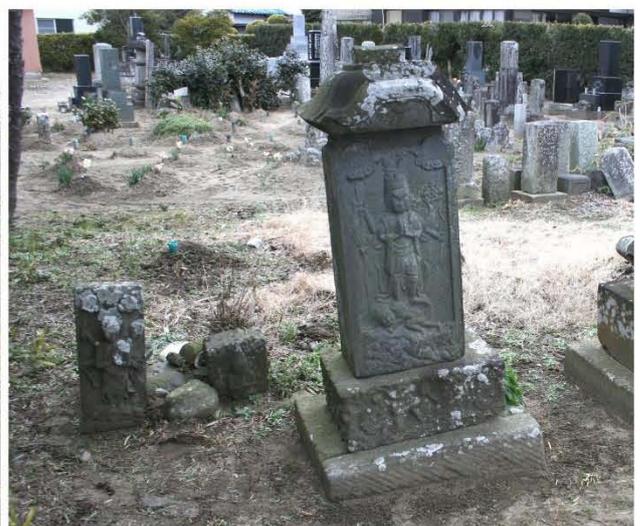
経塚地名の残る墓地

17. 西高野共同館前庚申塔

西高野の集落前の道に戻り、県道に出る手前の左側に西高野の共同館があり、その前の道路に向いて青面金剛を彫った庚申塔が立っている。また、十九夜塔がある。その後奥には墓地がある。横には小屋の様な建物が立ち、ここには元々お寺があったことを匂わせる。



西高野共同館前の墓地



西高野共同館前の庚申塔

18. 谷中道溝庚申塚

西高野から県道を南へ少し行くと、斜め右へ入る道があり、そこを真直ぐ行くと古屋から旭へ行く道にぶつかる。その道の反対側右に道溝の庚申塚がある。この庚申塚、1年のうち春先にだけ周りが草刈されてきれいになって姿を現す。その



谷中道溝の庚申塔

ほかには草が生えて庚申塔を隠し、見えなくなっている。この庚申塚は、青面金剛を彫った庚申塔が4基並び、その周りに庚申と文字を彫った飯岡石が敷かれている。この庚申塔は周りから集めたのではなく、左から2番目が正徳五(1715)年造立で、次に左端の80年後の寛政七(1795)年以後5年ごとに建てたものがある。この庚申塚は谷中の集落からは離れているが、前の道は裏街道としてかなり利用されていたことが考えられる。

19. 谷中高田の二十三夜塔、庚申塔

谷中道溝の庚申塚の横の農道を南へ行き、途中曲がりながらも谷中高田の集落に入り、一つ目の十字路を左に曲がり、少し行くと右側に庚申塔の文字塔があり、また右に曲がったすぐの所に二十三夜塔の文字塔がある。庚申塔は明治23年、二十三夜塔は安永年間の造立であるが、集落内の道の脇に立っているのは同じで、目立たないながらも地域で大事にされてきた石塔である。



谷中高田の二十三夜塔と庚申塔

20. 谷中上の村前地蔵

もとの十字路に戻ってさらに西へ行くと、正面に小さなお堂が建っている。中を覗くと石造にお地蔵様が安置され、地蔵堂であることが分る。丸彫りのお地蔵様で、さらしや赤布がかけられ、今も信仰されているらしい。



谷中上の村前の地蔵堂と石造地蔵

21. 谷中堀ノ内金刀比羅神社

上の村前地藏堂から道を西へとり、大布川用水路を渡りさらに西へ行くと、谷中堀の内集落に至り、その右側に鳥居があって、その奥に小さな祠のような社が立っている。これが谷中堀の内の金刀比羅神社である。町内では金刀比羅（金毘羅・琴平）神社は少ない。鳥居の前には、周りに庚申文字を彫った自然石が積み重ねられた、青面金剛像を彫った庚申塔が立っている。ここでは容像塔が1基のみであるが、周りの丸石自然石の数は負けていない。



谷中堀ノ内の金刀比羅神社

また、金刀比羅神社の小社の横には、十九夜塔と石祠が雨避けの下に立っている。その周りにも石塔の部分が置かれ、古くからの信仰があったことを物語っている。



金刀比羅神社脇の十九夜塔と石祠



金刀比羅神社前の庚申塔

22. 谷中稲荷神社

金刀比羅神社から少し東に戻って南へ行く道を辿ると、左側にひとときわ高くそびえる杉木立があり、その中に谷中稲荷神社が立っている。一間社流れ造りの社が、谷中の村社であることを現し、この大事な鎮守であることを示している。この神社ではかつて獅子舞が奉納されていたと言うが、今ではその獅子舞を舞える人がいなくなってしまったと言う。



谷中の稲荷神社

23. 谷中輪ノ内薬師堂

稲荷神社前から東へ、また大布川を渡ると左側に茂みがあり、その向うに谷中の集会所がある広場が開け、広場の西奥には墓地があり、その前に新しいお堂が立っている。お堂は元小さな方三間堂が立っていて、木造の薬師如来が安置された薬師堂で、最近建て直された。また、墓地の前には石幢があり、6面はそれぞれ異なった仏像が彫られた、変わった石



かつて立っていた薬師堂



薬師堂横の十九夜塔・二十三夜塔



薬師堂奥の墓地に立つ石幢

幢である。ただ残念ながら破損していて、上下が離れて立っている。

24. 谷中輪ノ内庚申塚

薬師堂広場の東側には、少し高くなった所に青面金剛を彫った庚申塚が立つ、庚申塚がある。今は周りをコンクリート板で周りを保護され、ほかに十一面観音や地藏なども立っているが、かつては大きな榎の木が背後に植えられ、割と大きな土饅頭を有した庚申塚であった。



谷中輪ノ内の庚申塚

25. 谷中浄善寺

薬師堂前から西へ戻って、一筋南の道へ行くと右側に古くはないお寺のお堂がある。このお寺は真言宗の浄善寺と呼ばれ、本堂は建て替えてまだ20年ほどしか経っていない。しかし、建て替えて数年後、このお寺に悲劇が襲って、今は無住となってしまった。



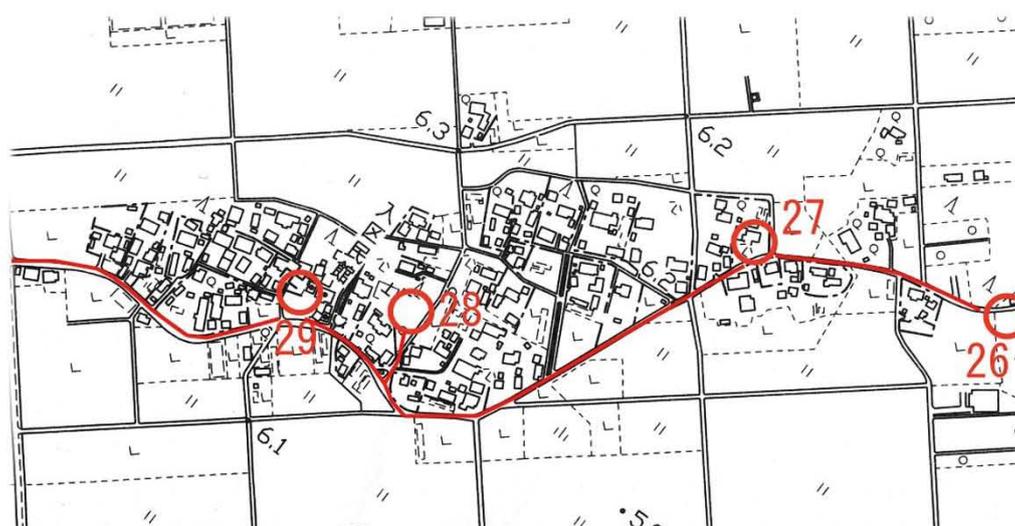
谷中浄善寺

三. 宮川入

入は谷中と同じ砂州(砂堤)列にあり、西へ道筋を行った東西に長い集落である。入は中央部で南北の幅があり、東西両端で細くなる紡錘形をした集落である。中央部にお寺があ2寺あるが、神社が見られない。おそらく熊野神社の氏子なのであろうか。

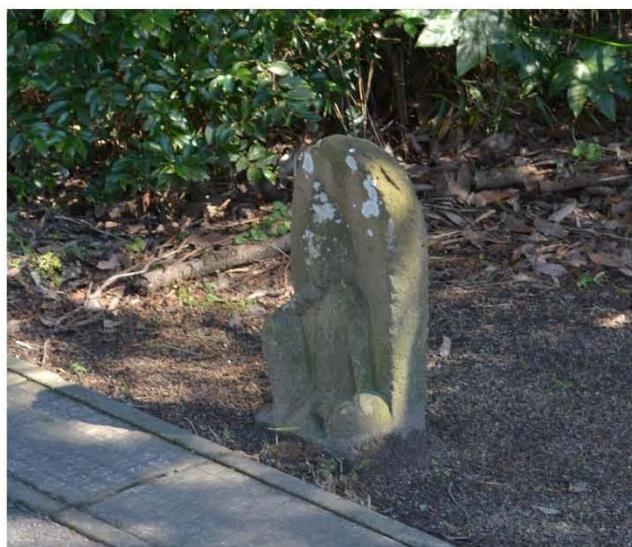


入地区遠景



26. 入十九夜塔

谷中浄善寺前から道を西へ行き、農免道路を越えて進み、道の両側が山林の間を抜ける所の左側に石仏が佇んでいる。如意輪観音像を彫った十九夜塔で、車で通ると気づかないほど、周りに何もなくひそやかに立っているのみである。



入の十九夜塔

27. 入の大師堂

十九夜塔からさらに西へ行き、道が左へ少しカーブする所の右側に、まだ真新しい小さなお堂が立っている。扉を開けて中を覗くと、石造のお大師様が3体台の上ののって安置されている。ここのお大師様は、右が一番、左が八十八番で、中央は無番である。これは東総新四国八十八箇所巡りのお大師様とは異なった、新しい大師講のお大師様であろうか。



入の大師堂と石造大師

28. 入、自性院

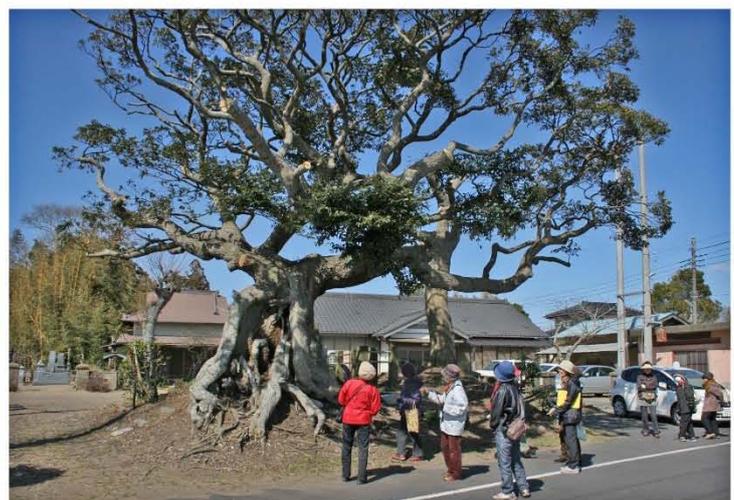
大師堂からさらに西へ行き、道がまた大きく右にカーブした先に、右に入る小道があって、そこへ入ると左側に広場があって、奥に小社二社その間に灯籠のような石塔が立っている。ここは自性院と呼ばれ、お寺であったと思われる。灯籠のような石塔には、四面それぞれに天照大神、金比羅権現、青面金剛、秋葉権現、津島牛頭天王等が彫られ、多目的の石塔であることが分る。境内にはこのほか墓石、地蔵などがある。小社に祀られている神様は分からない。



入、自性院

29. 入、東栄寺

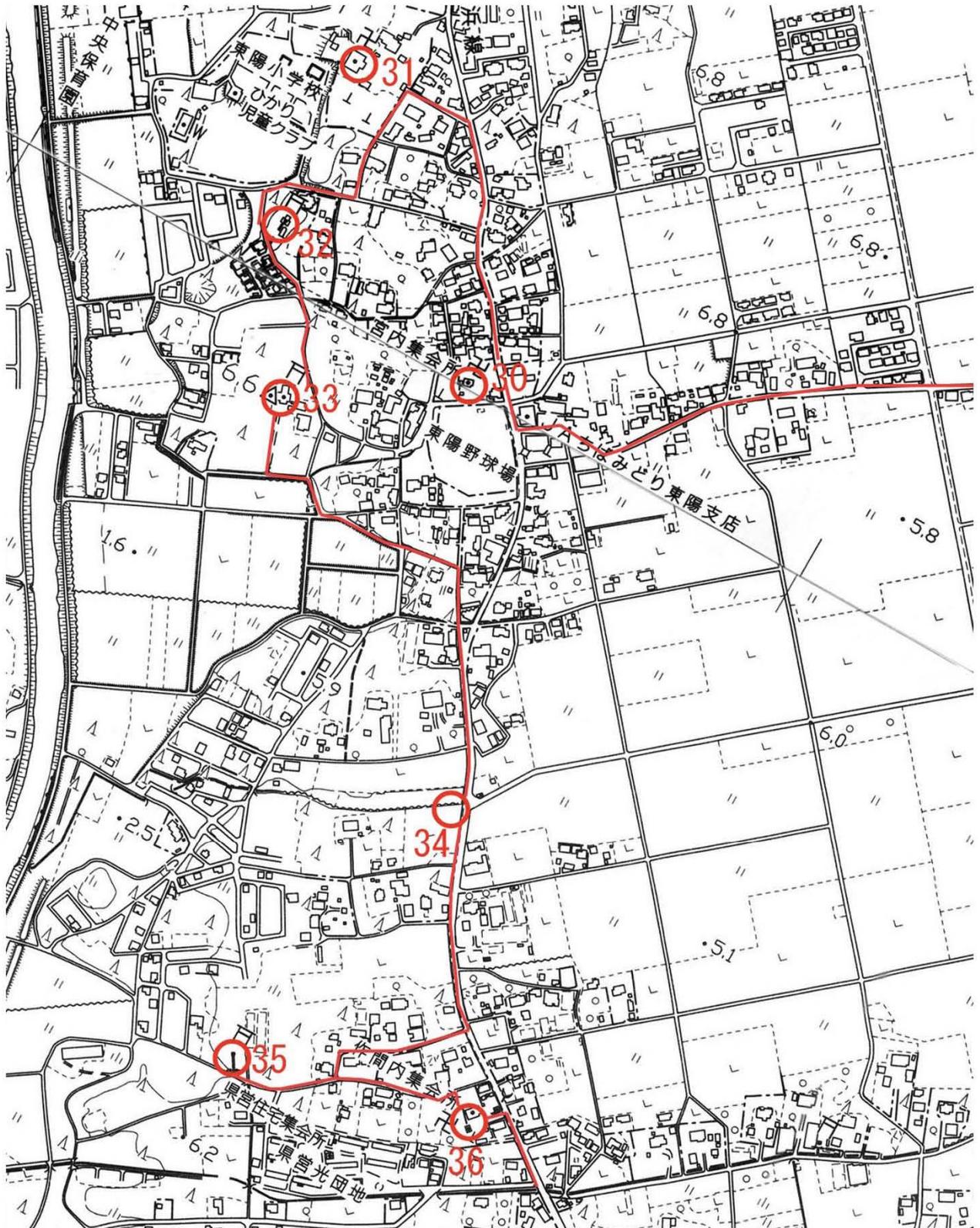
さらに西へ行くとまた右側にお寺があり、ここは入東栄寺と呼ばれる。境内に入ると左側にはここにも屋根を架けただけのお大師様があり、三十四番と六十四番の東総新四国八十八箇所の番号がふられている。



入、東栄寺

四. 宮内・作間内

宮内から作間内は、栗山川に沿った河岸段丘あるいは自然堤防上に形成された集落で、この微高地は北は橋場から、南は河口まで続く。普通の自然堤防であるならば直線的であるが、この栗山川左岸は川の蛇行と、東から延びる砂州とによって、複雑な地形になっている。お寺や神社はこの段丘上や中には砂丘上に立地し、これらを結んで旧道があったと思われるが、今はまっすぐ走る県道によって廃れ、分らなくなってしまった。



30. 宮内宝持院

入から道をまっすぐ西へ向かい県道横芝白浜線にぶつかり左側に農協があり、県道を渡ると左側が東陽野球場、右側に宮内集会所と児童公園、奥に共同墓地がある。ここは元々宝持院と呼ばれたお寺で、その名残は公園の隅に小さなお堂があり、その中に像高1m強の木造十一面観音立像が安置されていた。またお堂の中には寺院建築の部材の一部が残され、それなりのお堂を有したお寺があったことを示している。観音像は現在永享寺に保管されている。



宮内宝持院跡



木造十一面観音立像

頂相のひとつ



頂相のひとつ



木造大師像



石造大師像

31. 宮内世貴山永享寺

宝持院から県道を北へ辿ると、左側に世貴山永享寺と彫られた御影石の石柱が立っているのに当たる。そこを入ると仁王門があり、門を潜ると永享寺の境内である。正面には小高い砂丘上に本堂が立ち、その裏手には石造の大仏が鎮座している。このお寺の境内の左側の墓地前には、町指定の中世板碑が立っている。この板碑は黒雲母片岩製の下総型板碑で、中央に梵字の「キリーク(阿弥陀如来)」の主尊、その両脇に「サ(観音菩薩)とサク(勢至菩薩)」が彫られた、阿弥陀三尊板碑である。紀年名はなく、造立年は不明であるが、南北朝時代のものである。このことから永享寺は中世にはあったと思われる。



山門からの永享寺



町指定の板碑

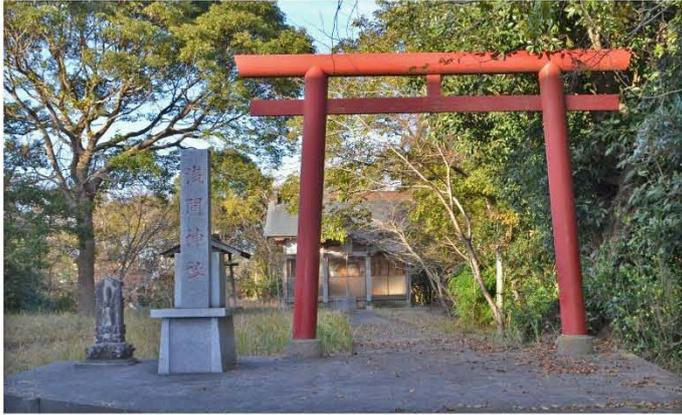


本堂裏の大仏

32. 宮内浅間神社

永享寺から山門の横を右に曲がり、裏道を南に行き、突き当りをまた右に曲がり、右側に小学校が見えると左に曲がり行くと、左側に神社がある。この神社も砂丘上にあり、高い所に立てた浅間神社である。浅間神社は富士山の木花咲耶姫を祭神とする神社で、町内にもこのほかにも浅間神社や浅間塚があり、この地域でも富士山信仰が盛んであったことが分る。

浅間神社の前には青面金剛を彫った野ざらしであるが、きれいな庚申塔が立っている。安永五(1772)年造立の駒形で、鎧を着たような青面金剛で、顔の憤怒相が邪気を払ってくれる様である。



宮内浅間神社



浅間神社前の庚申塔

33. 宮内熊野神社

浅間神社から前の道を南へ行くと、すぐ右側が薄暗い杜が広がっている。その先へ行くと右に建物が見えてくる。ここが宮内熊野神社で、本殿は南へ向き、参道が南へ伸び、その先に水田が広がっている。熊野神社は紀州熊野三社から勧請した社で、その年代は平安時代の熊野信仰が流行った時期にまで遡ると考えられる。その時代は千葉に紀州からの人々の移住もあり、それと共に熊野信仰も伝わったと思われる。千葉には勝浦とか白浜と言う地名も、その名残であろう。宮内熊野神社は平安後期から中世にかけてこの地域の有力者となり、荘園の寄進を受けて熊野神社領南条の庄が形成された。

宮内熊野神社には現在、3月に江戸時代から伝わる神楽が演じられ、その時は1年で最も賑わう。神楽は猿田彦で始まり、田うない、八幡、恵比寿など、面をかぶって十二座を舞い、五穀豊穡、豊漁を祈願する岩戸系神楽で、江戸時代に流行って伝わったものと思われる。



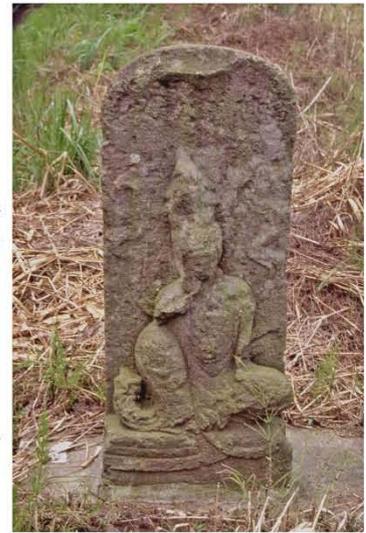
春例大祭の準備が整った熊野神社



神楽の一つ、恵比寿

34. 作間内十九夜塔

熊野神社の参道を出て、左に曲がり、県道に出て南に向かい、しばらく歩くと左側に新しいアパートがあり、その前の駐車場の端に十九夜塔が置かれている。この十九夜塔はかなり風化が進んで、如意輪観音の像容は不明瞭になっている。また、十九夜塔の側には細い流れがあり、やはり水子供養の石塔であろう。



作間内の十九夜塔

35. 作間内八坂神社

さらに県道を南へ行き、作間内の集落の間を右に入る道があり、そこを歩いていくと右の竹藪の中に小さな社がある。この神社が作間内の八坂神社で、覆屋の中に小さな本殿がある。熊野神社は須佐之男命が主祭神で、八坂神社は牛頭天王が祭神であり、どちらも呼び名は違うが、同じ神様である。この地域に同じ神様を信仰する人々がいたのだろうか。



作間内の八坂神社

36. 作間内正等院

八坂神社から元の道に戻ると右側に墓地が見え、その先に堂宇が立っている。ここが作間内の正等院で、県道からの正面に方三間堂があり、右側には本堂(庫裏)がある。方三間堂には木造阿弥陀如来坐像と、僧の頂相(高僧の似せ像)が安置されている。境内の左側には六地藏とお大師様があり、今は住職も居ず、大きなお寺ではないが、大事にされたいお寺である。



正等院境内と本堂



正等院の六地藏



本堂内の頂相 木造阿弥陀如来座像

37. 作間内子安神社

正等院前の県道を南へ歩くと県営住宅の表示板のある十字路を、反対側の左に曲がってしばらく歩き、民家が切れる左側の茂みの中に鳥居があり、その奥に社がある。社の中を空けると本殿に赤子を抱いた像が2体安置され、子安大明神を祀った神社であることが分る。像は木造で、最近はあまり手入れされてなく、少し痛んでいるが、子安様の信仰を知ることができる。



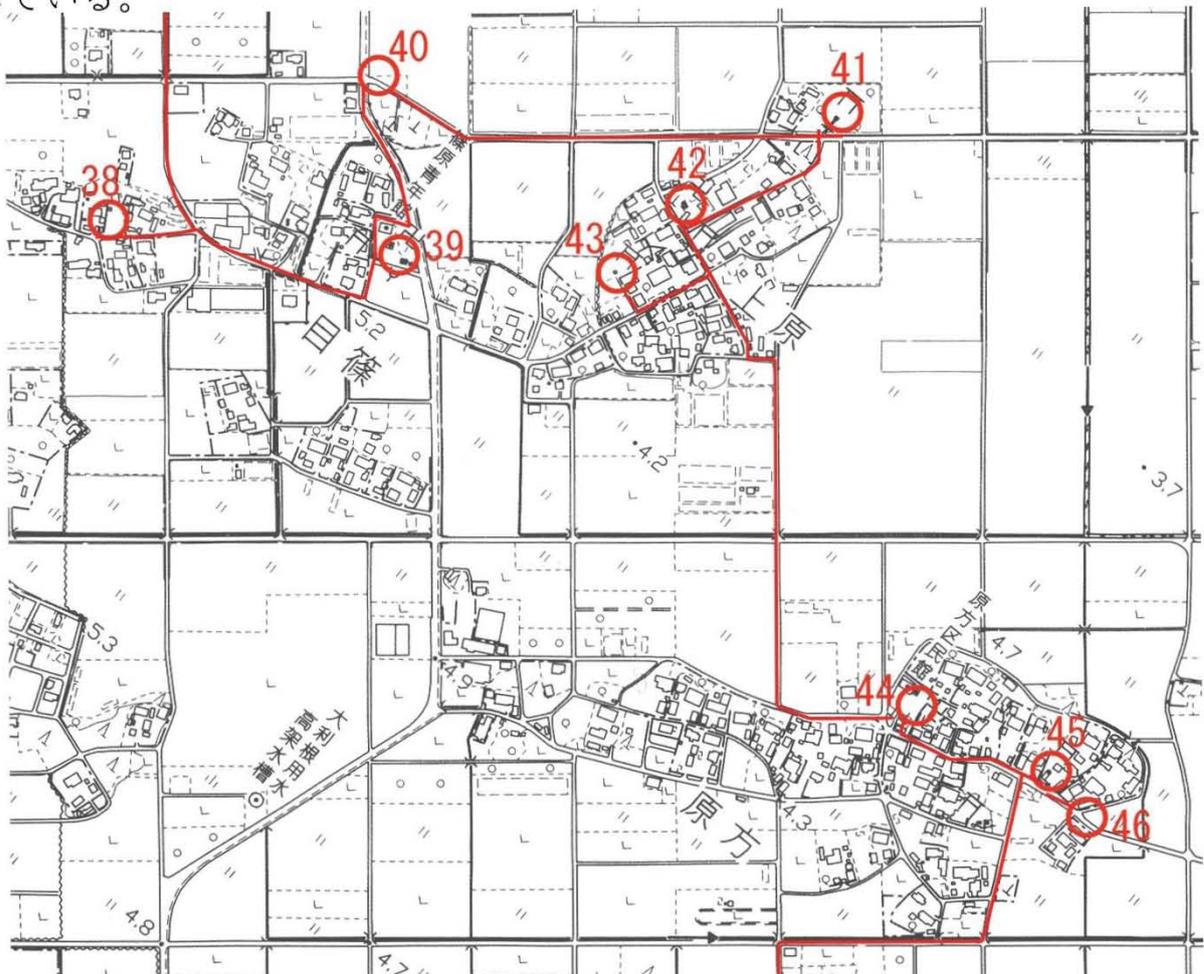
作間内子安神社



祠内の木造子安大明神

五. 上原・目篠・原方

作間内の南側が上原、目篠、原方であるが、この地域は栗山川岸から匝瑳市境まで横に広がるが、地籍はモザイク状に入り乱れ、郵便配達の泣き所となっている。傾向的には北から上原、目篠、原方となるが、最近ではこれらを総称して篠原と呼んでいる。やはり、九十九里平野の砂州上に集落が形成されている。



38. 目篠豊受神社

作間内の子安神社から東へ行き、一つ目の十字路を右に曲がり、水田を越えて次の集落域に入り、目の角を右に曲がり少し行くと、右側に鳥居が立っているのに気づく。中に入ると小さな本殿の右横に石塔が立っていて、三山碑のほか、その奥には庚申塔が3基並んで立っている。また、本殿の後ろには古そうな石塔群の石積みがあり、武蔵型板碑や中世石塔が山積みになっている。



目篠豊受神社



豊受神社右側の石塔



豊受神社裏に積まれた中世石塔

39. 目篠大正寺

豊受神社前から左に行き、通りへ出る手前を左に曲がると広場と、奥に石塔群と大師、大正寺の変額が架かるお堂が立っている。また、東側には小社が立っているが、これには何の神様を祀っているか分らない。お大師様は二十四番と三十番で、並んで立ち、境内の左隅には古い墓石が寄せられている。また、右隅には中世の一石宝篋印塔が転がっていた。



目篠大正寺境内



大正寺境内の墓石



大正寺の大師塔



大正寺横の神社

40. 上原辻の十九夜塔

大正寺からスクールラインに出て北方に、東へ行く道の曲がり角の辻に十九夜塔が立っている。十九夜塔の後ろには卒塔婆が多数立っていて、中には新しいものもあり、今も拝まれていることが分る。最近は十九夜講はほとんど廃れてしまったが、子安講と一緒にあって、その中で信仰されているのだろう。



上原辻の十九夜塔

41. 上原八幡神社と庚申塔

十九夜塔前の道を東に行き、左側に住宅と杜が見えてくる。その杜の中に八幡神社の小さな社が鎮座する。八幡神社の周りは鎮守の杜が茂り、その杜の西側に生える大きな椎の木の根元に庚申塔が3基立っている。庚申塔は2基が青面金剛の像容塔で、1基は文字塔である。また、神社境内には板碑があり、これには「南無妙」の文字が彫ってあり、町内では珍しい題目板碑である。



上原八幡神社



八幡神社境内にある題目板碑

このほか、神社境内や庚申塔の前などに、石祠が立っているが、ほとんど神名が見えないため、何の神様を祀っているか分からない。



八幡神社脇の庚申塔



大木の下での庚申塚と石祠

42. 上原持宝院

八幡神社の前から南へ入る道を行って、突き当りの右側の開けた所が上原持宝院である。右奥には墓地があり、右手前には新しい建物があって、これが今の本堂となっている。しかし、かつてはここにも方三間堂があって、木造十一面観音立像が安置されていた。また、角には小さな社があるが、祭祀されている神様は分らない。



上原持宝寺境内

43. 上原薬師堂

持宝院から左に折れ、すぐまた右に曲がり、ちょっと歩くと右側に入る所があって、その奥に小さなお堂が立っている。これが上原薬師堂で、中に木造薬師如来立像が安置されている。持宝院の十一面観音もこの薬師如来も、作風は良く似ていて、同じ時期、同じ仏師によって造られた仏様かもしれない。ここにはほかに焼け焦げた仏様も3体あり、ここではないにして火災に会った仏様を大事にしている。



持宝寺脇の小社



上原薬師堂



木造薬師如来立像 木造十一面観音立像



被災木造仏

44. 原方隆原寺

上原の集落から南へ出て、一つ南の砂州上集落の原方へ行き、左に曲がって東へ行くと突き当りに広場があって、その左側に原方区民館があり、その横に隆原寺のお堂としたこじんまりした小振りな建物が立っていて、中には木造不動明王像と聖観音像が安置されている。境内の南隅には、石塔が寄せ集められていて、その中には庚申塔や十九夜塔、馬頭観音などを見ることができる。かつては目立つように立てられていただろうが、今は役目を終えてただ隅に追いやられた様である。また、石塔群の向いには大師塔が2基並んで立っている。



原方隆原寺入口



隆原寺の石塔群



木造聖観音と不動明王像



隆原寺の大師塔



原方八坂神社

45. 原方八坂神社

隆原寺から東へ道を辿ると、左側に鳥居が立ち、奥に社が鎮座し、横に石祠が2基置かれている。小さい社であるが村の鎮守であろう。

46. 原方辻の庚申塔

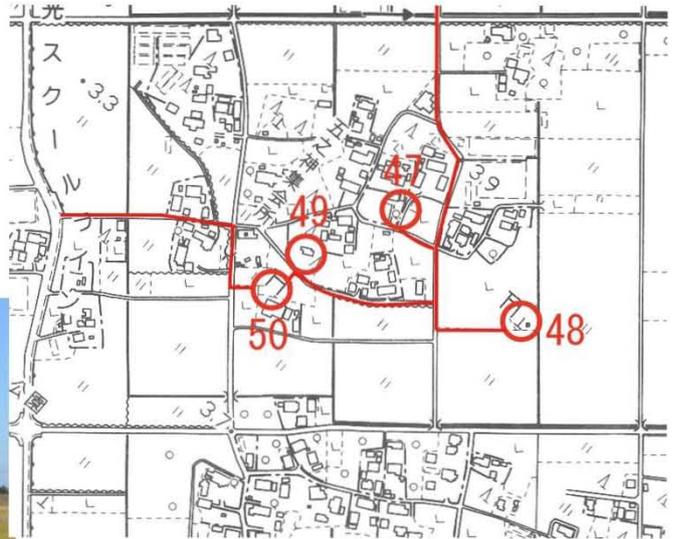
八坂神社前の道をさらに東へ行くと、三叉路の所に小さな石塔が立っている。風化が進んでいるが、青面金剛を彫った庚申塔であることが分る。ここが原方の東はずれに当たり、村の入り口に立てられた庚申塔であろう。



原方東外れの庚申塔

六. 五ノ神

五ノ神は原方の南に島状にある集落で、十数軒ほどが寄り添う小さな地区である。周りを水田に囲まれ、砂州のように特に高いわけがなく、ほとんど平らな所に形成された、平野の中の集落である。



47. 旧木戸陣屋西門

五ノ神の集落のほぼ中央部にあって、南に向けた長屋門の内、東にあるのが旧木戸陣屋西門を移築したものである。木戸陣屋は江戸時代幕末、外国船が頻繁に来航するのに対し、幕府が佐倉藩に対し九十九里浜海防のため、設置した施設である。この門はその陣屋の西門で、当時、木戸陣屋付きの医者であった最上家が、明治後に下げ渡されたものであるという。今はその最上家の長屋門になっている。



旧木戸陣屋西門

48. 五ノ神子安様

旧木戸陣屋長屋門から東に出て、突き当りを右の曲がり南へ行き、集落が切れると東の水田の中にぽつんと塚の様な茂みがある。そこには子安神社があり、脇には小社が立っている。小社の中に石祠があって、その中に石の子安大明神が安置されている。



五ノ神子安大明神



石祠の中の子安様

49. 五ノ神重輪寺

子安様の小社から農免道路を渡って西に向かい、五ノ神集落の南縁に沿って行くと、右側の茂みの中に小屋のような建物があり、右側に石碑が立ち、左側の大木の脇には大師塔と、小堂が立っている。ここが五ノ神重輪寺である。元は方三間堂が立っていたと思われるが、小さな集落では維持することが難しかったので



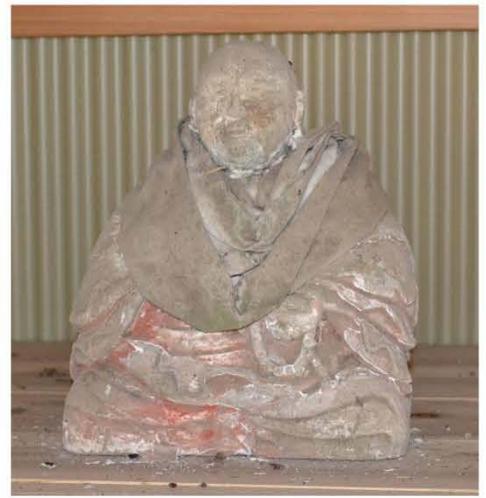
五ノ神重輪寺



十九夜塔



大師塔



木造大師像

あろう。今は小屋のようなお堂に建替え、中に観音様とお地蔵様を安置しているのみである。また、左の小堂には木造お大師様があり、石の大師塔と合わせ、大師信仰が盛んだったことを思わせる。その奥には十九夜塔があり、石碑の奥には庚申塔の断片が転がっている。

50. 五ノ神八坂神社と子安神社

重輪寺の道を挟んだ南側に、集会所と児童公園があり、その一角に鳥居と小社が2つ並んで立っている。左側の社が八坂神社で、右側が子安神社である。両方とも中に小さな本殿があり、神様を祀っている。



八坂神社と子安神社

七. 長塚

長塚は、栗山川左岸から県道横芝停車場線沿いの間で、地籍では木戸に入り、小字で六十五割とか漢数字に割を付けて呼ばれ、今では通称として地域の名称で呼ばれている。栗山川はこの辺りで大きく蛇行し、そのためか微高地の出入りも大きくなり、この微高地には砂丘が多く形成されている。長塚という地名も、この砂丘によったものか、あるいはこの付近に中世居館があって、その土塁によったものか今では定かではない。今はだいぶ平らになってしまったが、昔話では結構塚のような小山があったと言いき、崩す際には色々なものが出たという。今では地名と伝承でしか、想像できなくなってしまった謎多きの所である。



51. 長塚星ノ宮神社

五ノ神からスクールラインを越え、西に進んで県道に出て、少し北へ行くと、県道の右側に神社がある。きれいに手入れされた境内に、赤く彩色された社は、今も地域の人々に大事にされている証拠であろう。星ノ宮神社は妙見様を祀った神社で、妙見様は千葉氏の氏神である。そのようなことから、この辺りに千葉庶流の椎名氏の居館があって、椎名氏の一派が住んで居た事が考えられる。



長塚星ノ宮神社

52. 長塚宝満寺

星ノ宮神社から県道を渡って少し南に西へ入る道があり、そこを歩いて行くと右側に広い境内のお寺が見えてくる。ここが長塚宝満寺で、長塚の中心寺院である。境内には瓦葺きの本堂と、その横に方三間堂が立っている。堂内には木造観音菩薩像が本尊として安置され、堂の前には様々な石仏が於かされている。また、境内の脇には、町内では珍しい不動明王像がある。



宝満寺本堂



本堂前の石仏群



本尊の観音菩薩像



大師像と不動明王像

53. 長塚二十二割の庚申塔と道祖神
宝満寺前から少し東へ戻ると十字路があり、そこを右に曲がって行き、突き当たりを左に曲がって2つ目の右に入る道を曲がるとすぐ、大きな木の根元に石祠と石塔、地蔵がうづくまる様に於かれている。石祠には道祖神と彫られ、寛政十三(1801)年の紀年銘が読め、江戸後期、ここに道祖神が祀られている。

道祖神の先は、屋根が掛けられた庚申塔が立っている。この庚申塔は寛政十二(1800)の紀年銘があり、上の道祖神より1年前の、江戸後期のものであることが分かる。像容は風化が進んで、面相などがよく分からなくなっているが、はじめから省略して彫られた様にも見える。しかし、今も屋根が掛けられ、地域で大事にされていることがよく分かる。



長塚二十二割の庚申塔



長塚二十二割の道祖神

54. 長塚六十四割の庚申塔

二十二割の道祖神から道を前の東西道を西に戻り、すぐ左に曲がる道を南に往き、しばらく道なりに真直ぐ行き、右側が藪になった所があると、そのわずかに開けた所に、庚申塔が3基立っている。ここに庚申塔が立っているということは、この前の道筋が元々の街道であった証拠で、道はさらに南へと続いている。3基の庚申塔で最も古いのは中央で、元禄三(1690)年の紀年銘があり、町内でも最も古い方である。ちなみに左のは明治五(1872)年で、像容塔では最も新しい方である。右のは紀年銘が無い。



長塚六十四割の庚申塔

55. 長塚六十七割寺跡

道を北へ戻り、X字路を右に曲がって行くとまた県道に出る。県道を渡って少し南に東へ行く道があり、そこを行くとすぐ左に開けた所がある。そこへ入ると両側に石仏が並び、さらに奥には寺らしい建物がある。また、両側には墓地があり、寺らしい建物の横には、大師塔と不動明王像がある。この寺の名前は、今は分からない。



長塚六十七割の寺跡



十九夜塔



不動明王像と大師塔

56. 長塚天祖神社

長塚六十七割寺跡の南東に杜がありその手前には鳥居があって、その中に小さな社が立っている。これが長塚天祖神社で、きれいに清掃された境内に西にむいた赤く彩色された社がある。社の前には右側に庚申塔と二十三夜塔の文字塔があり、左側には石祠が3基置かれ、周辺にあったものがここに集められたものか。



天祖神社本殿



庚申塔と二十三夜塔



石祠群

57. 長塚七十四割のお堂

長塚天祖神社から横の道を東に行くと、開けたところの右にひかりしおさい公園があり、その反対側に共同墓地があって、その北側の一角に小さなお堂が立っている。小堂の中には奇妙な木像が安置されている。頭は総髪で、左胸に紐を結んだ着物を着て、手は正面で袖の上から合わせている。足は座して、おそらく女性像と思われる。このことから仏像と言うよりも神像のようである。それならなぜここに神像が安置されているのだろうか。また、墓地脇には十九夜塔と大師塔がある。



長塚七十四割共同墓地とお堂



共同墓地脇にある十九夜塔



堂内の神像？

58. 木戸弁天様

長塚共同墓地から南へ道を取り、しおさい公園の脇を貫けて、突き当りを右に曲がって県道に出ると、左側の田んぼの中に木が生える小さな島の様な所に、鳥居と祠2社が立っている。左側の社の中には石祠が2基あり、弁天様と思われる神が祀られ、右側の社は前に陶製狐が置かれ、稲荷様が祀られている。



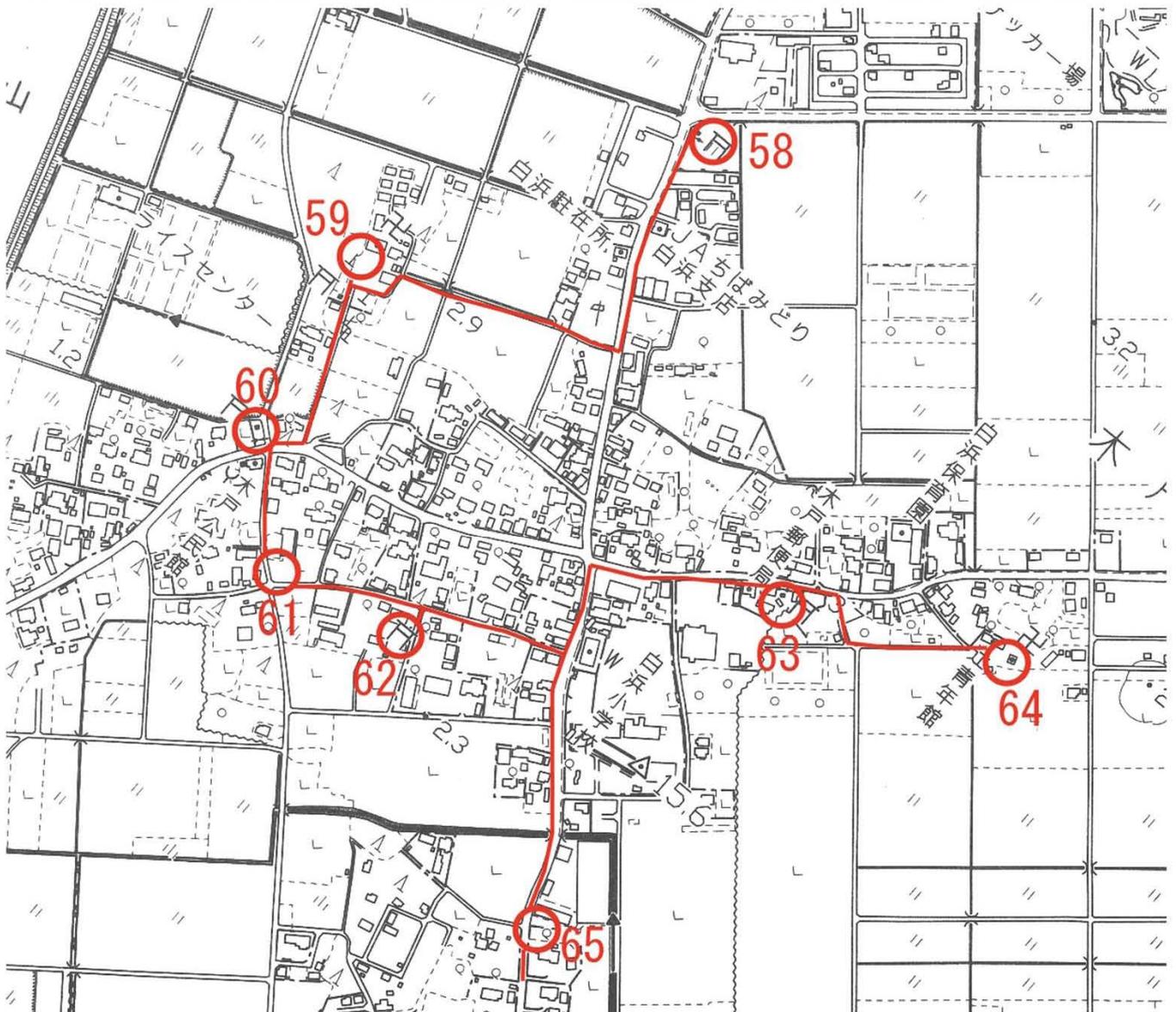
木戸の弁天様



左の社が弁天様で右が稲荷様

八. 木戸十字路口周辺

木戸十字路口は県道横芝停車場線と飯岡一宮線が交差する所で、飯岡一宮線は海岸に平行に走り、砂州上を貫く道である。木戸十字路口周辺は、旧白浜村の中心で、光地区南部では最も住宅が集住し、郵便局や農協などが所在している。地区名では辻や木戸などがあるが、明確にその区域が分かれているわけではなく、地域の共同体紐帯は薄くなっているのが、様々な伝統文化の継承が難しくなっている原因であろう。



59. 木戸光泉寺

長塚弁天様から県道を南へ行き、二つ目の西へ行く道を行くと、突き当たりに光泉寺がある。光泉寺は町内では少ない浄土宗寺院で、本尊は阿弥陀如来である。寺の参道は県道飯岡一宮線からあり、参道の途中には庚申塔や石塔が立ち、境内の左側には塚のような無縁仏塔がある。



木戸光泉寺



光泉寺境内にある無縁仏塔



光泉寺参道脇の庚申塔

60. 木戸三社宮

光泉寺の参道を出てすぐ右に曲がると十字路の西側に三社宮のお宮がある。社宮は二つの祠があるが、伊耶那岐命と伊耶那美命、須佐之男命の三神を祀っていることからこう呼ばれている。境内には石灯籠や狛犬が置かれ、小さいながらも神社として地域で祀られている。



木戸三社宮

61. 木戸二十五割の石塔群

木戸公民館の横の道を南に行き、一つ目の辻の左側に石塔が3基立っている。うち2基が青面金剛の容像の庚申塔で、左が馬頭観音である。



木戸二十五割の石塔群

62. 木戸二十六割の大師堂

角の石塔宮から東へ曲がり、左に大きな門を構える向かいに、南へ行く道があり、畑へ出る手前の右側に小堂に手水鉢を置いた所がある。小堂を覗くと中に「南無大師遍照金剛」と彫られた石塔が立っていて、大師堂である。大師堂へ行く手前の角には、最近建てた道祖神がある、男神と女神が寄り添う双体道祖神で、近所の方が建てたのであろう。



二十六割の
大師堂



角の道祖神

63. 木戸の石碑

木戸の十字路から県道飯岡一宮線を東に行き、木戸郵便局を過ぎた右側に石塔が2基立ち、また横に忠魂碑もある。鉄平石製の石碑には、阿夫利神社と成田不動尊と彫られ、古くはない。その横には参拝記念と彫られた石柱があり、左の阿夫利神社と成田不動尊に参拝した記念碑であろう。阿夫利神社は神奈川の大山阿夫利神社のことで、雨水の神様として知られ、今も多くの参詣者で賑わう。

堂の中の石塔



木戸の石碑

65. 関庚申塚

木戸十字路に戻って、また南へ向かい、しばらく行くと榎の木の垣根の間の左側に、石が積まれた塚があり、上には青面金剛を彫った庚申塔が3基ある。2基は立っているが、1基は横たえられている。周りの石は飯岡石の自然石で、庚申の文字が彫られ、塚を造っている。この庚申塚は、今は省みられなくなり、あまり手入れされてなく、一見すると庚申塚であることを見過ごしてしまう。



関の庚申塚



庚申塚に立つ庚申塔

64. 辻観音院

県道をさらに東に進むとすぐ右に入る道があり、そこを歩いてすぐ左正面に辻観音院がある。ここにも方三間の本堂があったが、平成28年7月の台風で損壊し、今はない。観音院は浄土宗で、本尊は阿弥陀如来であるが、寺名のようにお堂の中には木造観音菩薩、不動明王像が安置されていた。阿弥陀如来は平安時代後期の定朝様式の、見事な仏様であることから県指定になっている。左側の辻青年館前には庚申塔や十九夜塔が、右奥には大師塔や木造大師を安置した小堂がある。



かつてあった観音院本堂



木造阿弥陀如来座像



観音菩薩像



観音菩薩像



毘沙門天像



不動明王像



辻青年館前の石塔群



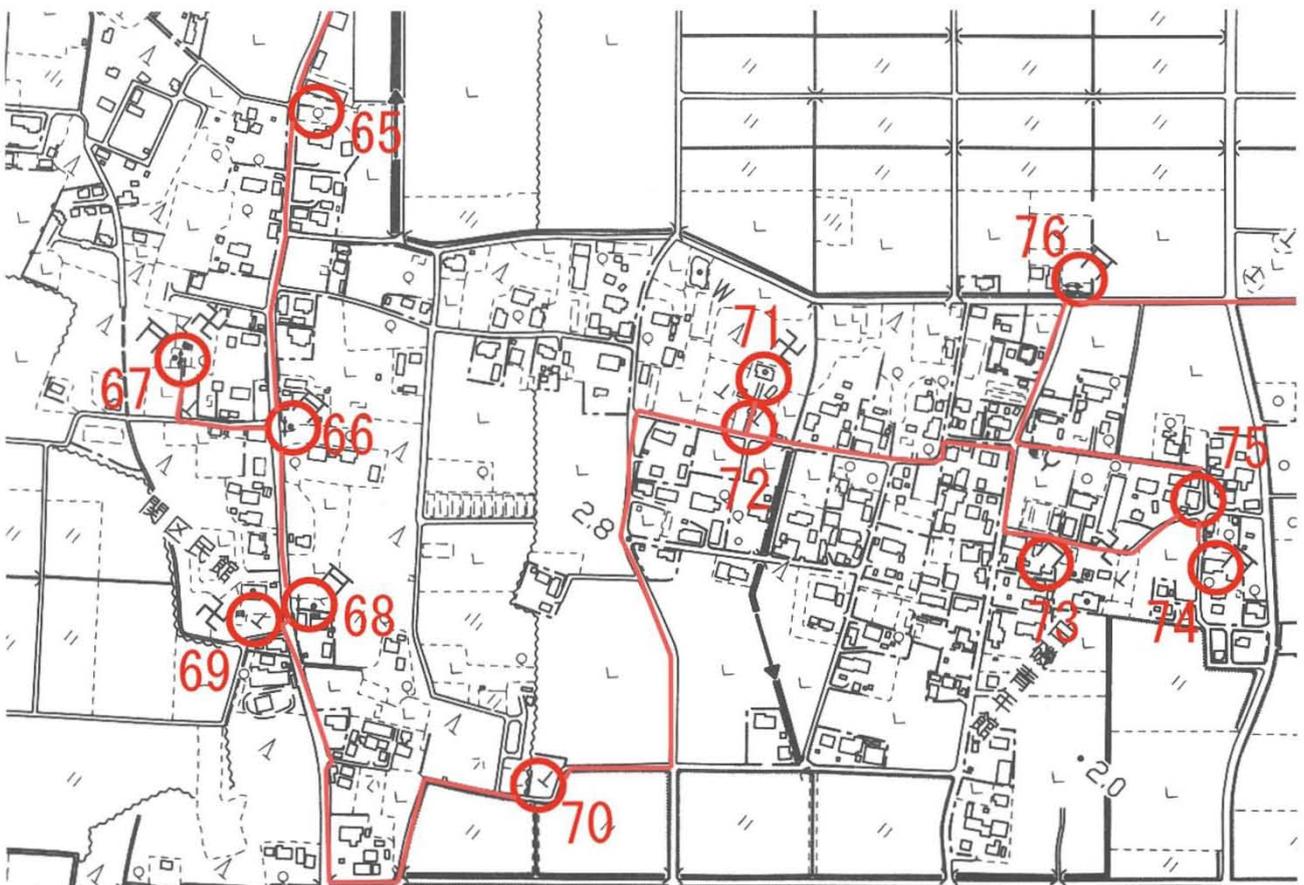
大師堂と石仏

九. 木戸関・辻・白磯

木戸の十字路から海岸へ向かう県道沿いは、関・辻とが混在していて、その範囲はよく分らない。県道沿いに集落が続き、栗山川に平行していることから、その自然堤防といえるかもしれない。白磯は関から東へ延びる砂州上にあるが、このあたりでは内陸ほど明確ではなくなっている。白磯はかつて東部を高谷(野)、西部を山柄と呼ばれ、別々であったという。



北から観た白磯遠景



66. 関八坂神社

県道を南へ行くと関区に入り、左側に鳥居が立ち、奥に小さな社がある。関の八坂神社で、鳥居と小さな社があるだけの神社で、ほかは何も無い簡素なたたずまいである。



関の八坂神社

67. 関地蔵院

八坂神社の向かいに西へ行く道があり、そこを入ると右側に地蔵院と彫られた御影石の石塔が立ち、奥に石塔と墓が見える。ここが関の地蔵院で、入り口の左側には十九夜塔が2基置かれ、木の裏側に地蔵菩薩の石像が立っている。中は広場になっているが、お寺のお堂すらなく、墓地があるのみである。かつてはお堂があったと思われる。



地蔵塔



地蔵院入口



十九夜塔2基

68. 関金毘羅神社

また県道に戻り、南に行くとまた左側に神社がある。ここも小さな社があり、その前に手水鉢と鳥居があるのみである。



関の金毘羅神社



壊れた手水鉢

69. 関の慈覚寺

金毘羅神社のむかいには広場があり、北側に集会所があって、奥には小さなお堂が立っている。左側にはさらに小さく古びたお堂が2宇あり、こちらにはお大師様と子安観音が安置されている。奥のお堂には町内では珍しい地蔵菩薩坐像が安置され、前記の地蔵院といい、関では地蔵信仰が主であったのだろう。



関慈覚寺門前



銅造地蔵菩薩座像



木造大師像



木造子安観音立像



地蔵と十九夜塔



大師塔

70. 関二十九割の庚申塔

金毘羅神社前から県道を少し南へ行き、一つ目の左の小道を入り、すぐまた左に曲がって、右に折れていくと、左側に墓地があり、その道脇の一角に青面金剛像の庚申塔が立っている。



二十九割の庚申塔

71. 白磯不動院

関二十九割の庚申塔前から東に行き、一つ目の十字路を左に曲がり、二つ目のT字路を右に曲がってすぐ左側に六地藏や石仏が並び、奥にお堂が立つ寺がある。ここが白磯不動院で、奥には最近建て替えられた本堂があり、左側には古い方三間堂がある。三間堂の後ろには町指定の中世板碑があり、ここが中世には人の活動があったことを示す。この不動院の周りには土塁のような高まりがあり、ここに来るにも道を曲がりながらでないとは来られない。そのようなことからここが居館跡であったかも知らない。



不動院門前（山門は今は無い）



不動院不動堂



木造不動明王



木造聖観音



木造青面金剛



中世板碑

72. 不動院前の石仏群

お寺の前の道沿いには屋根が架けられ、服を何重にも着せられた六地藏、それに十九夜塔、万霊塔が立ち、右側には庚申塔、左には馬頭観音が立っている。



六地藏、十九夜塔、万霊塔



十九夜塔、庚申塔

73. 白磯高野正光院

不動院前から道を東にとり、途中道が鍵の手に曲がりながら行くと十字路があり、そこを右に曲がってすぐ左側奥に広場が見え、そこへ行くと石塔や祠、お堂が立ち、奥には白磯青年館がある。ここが白磯高野の正光院である。入り口の左側には十九夜塔や庚申塔が立ち、境内の北側にお堂が立ち、それに並んで小さなお堂や祠がある。奥は墓地になっていて、古い墓塔が立ち並んでいる。



正光院の本堂、子安神社、大師堂



石造の新旧大師塔



正光院前の十九夜塔、地藏、庚申塔など



墓地の古い像容墓塔

74. 白磯高野の子安様とお大師様

正等院前の小道を東に行くと狭い十字路に当たり、その右向かいに鳥居が立つ小さな社と小堂が並んで立っている。右が子安大明神社で、左は大師堂である。子安大明神には中に子安様が彫られた石祠がある。社の横には石造の十九夜塔が立っている。



十九夜塔、大師堂、子安大明神



木造大師



石造子安大明神



十九夜塔



大師塔



読誦塔と馬頭観音

大師堂、子安観音前の石仏群

75. 白磯高野の石塔群

子安大明神社の斜向いの道脇には、庚申塔をはじめとした石塔が4基並んで立っている。庚申塔は2基、その間に大六天を祀った石祠、最も右側に石尊大権現を彫った石塔で、いずれも地区を守る神様である。道脇で日もあまり当たらないため、いずれも苔むして古びているが、大事にされているようである。



白磯高野の石塔群

76. 白磯高谷の神社と庚申塔

十字路から北へ行くとその突きあたりに鳥居が立っている。鳥居の先には小さな社があって、祀られている神様は分からない、社の左側には青面金剛像の庚申塔が2基立っている。大小であるが、どちらも笠角柱形で、苔むして古びている。大きい方は笠が破損し、本体も一度割れたようである。周りは大きな木は無く、草原の中に小社とともに立っているため、風雨にさらされて、傷みが著しくなっているのだろう。



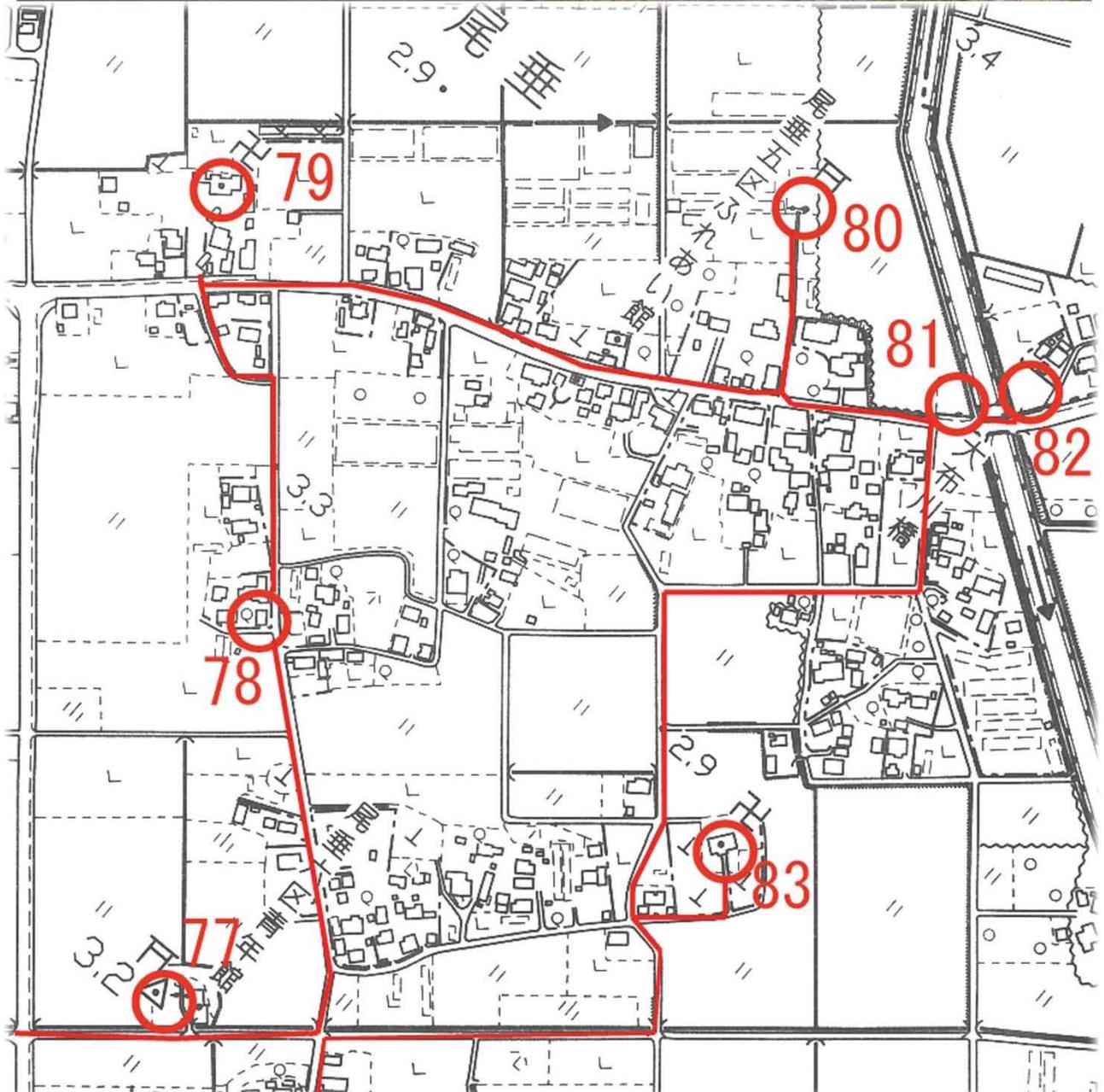
白磯高谷の社と庚申塔



庚申塔2基

十. 尾垂五・六区

尾垂は匝瑳市の境で九十九里海岸に接するところで、海岸砂堤とその一つ奥の砂堤に集落が形成されている。尾垂の地名は、平安時代、源義家がここを通った際、狐が出て助けてもらったことを尾を垂れて礼を言ったことによるとされるが、そうすると成田山の不動明王が陸揚げされたのが尾垂浜だと言う事と、時間的に合わないため、これらの伝説の真偽は定かでない。

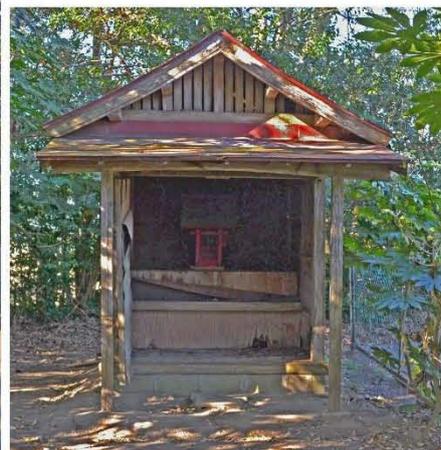


77. 尾垂善生の巖島神社・子安神社

白磯からスクールラインを超え、東へ行って農免道路を渡ると左側に尾垂六区の青年館があり、その敷地内の左側に鳥居があって、その奥に社が2つ立っている。鳥居の奥の社は巖島神社で、覆屋の中に小さな本殿が収まっている。巖島神社の左側は少し高くなっていて、その上に小さな子安神社の社がのる。この辺り、時たま小さな小山があり、ここの様に神社が鎮座したり、墓地が置かれたりして、塚と間違われそうであるが、ほとんどが砂丘の名残と思われる。



子安神社と巖島神社



巖島神社の社

78. 尾垂天満宮

巖島神社前から前の道を東へ行き、一つ目の十字路を左に曲がりしばらく行くと左側に藪があって、その中に小さな祠のような建物が立っている。祠の中には町内ではここだけの木造菅原道真公の神像が安置され、天神様を祀った社であることが分る。小さな社でありながら天満宮と書かれた扁額が掲げられ、そう呼んでいる所に、天神様への信仰の厚さが伺われ、なおかつ、学問へ向かう意識の強さがあったことを思われる。



尾垂天満宮の社



社の中の天神神像

79. 尾垂新隆寺

天神様からさらに北へ行き、県道に出る手前を左に曲がり、道が右に曲がった正面の県道を越えた先にお寺が見える。これが尾垂新隆寺である。新隆寺は尾垂観音と呼ばれ、十一面観音を本尊とし、中世にはこの地域に勢力を誇った。今は無住となり、静寂になって地域に管理されるのみである。境内の左側にはお大師様を安置した小堂があり、お寺の門前の左側には、彫刻の見事な庚申塔が立っている。また、境内の南側には、珍しい春山茶花が植えられていて、春、3月頃満開を迎える。



新隆寺門前



新隆寺本堂



門前の庚申塔



大師堂と大師塔



満開の春山茶花

80. 尾垂妙見神社

新隆寺前の県道を東へしばらく行き、大布川の手前の左に入る小道を行くと、その先に尾垂妙見神社がある。妙見様は北極星を神格とした神様で、千葉氏の守護神とされ、千葉県内では各地で祀られている。この神社には亀に乗った木造妙見大明神像の神像が安置され、神像としては珍しい。神社の右側には子安様の祠があり、中に子安大明神の神像が祀られている。



尾垂妙見神社



木造妙見大明神



妙見神社横の子安様



祠内の子安大明神

81. 尾垂三軒屋大布川脇の十九夜塔
 県道をさらに東へ行き、大布川の
 袂に来ると、道路左側の脇にある木
 の覆屋に如意輪観音を彫った十九夜
 塔が2基並んで立っている。右側の
 は破損して上部が欠け、中央部で破
 断していたのを修復している。ここ
 ではこのように十九夜塔を大事にし
 ていることがよく分る。



尾垂三軒屋大布川脇の十九夜塔

82. 大布川東側に十九夜塔と庚申塔
 大布川を渡るとすぐ脇に十九夜塔
 が立っている。これも屋根が架けら
 れている。大布川は新しい川である
 ため、この川の両側にある十九夜塔は、もともと同じところに並んでいた
 かもしれない。川を渡ってすぐ降りたところに庚申塔が立っている。ここ
 は匝瑳市との境であるが、取り上げた。



尾垂三軒屋大布川東側の十九夜塔



左土手下の庚申塔

83. 尾垂知足院

大布川橋から南へ道を取り、一つ目の角を右に曲がり、突き当りを左に曲がってまっすぐ行くと、左の方に墓地が見えてきてそこへ行くとお寺がある。お寺は正面奥に本堂があり、右側に古い墓石があって、その手前に馬頭観音、向かいには大師塔が立っている。本堂の後ろには愛宕神社と子安社があって、寺とともに信仰されている。



尾垂知足院門前



大師塔 2 基



子安神社と愛宕神社



子安大明神



馬頭観音

84. 尾垂道祖神社

知足院からまた農免道路に戻り、南へ行くと左側に鳥居が立っている。よく見ると 2 基の鳥居に二つの社が立っている。右側には道祖神と彫られた石祠と地蔵が納められ、左側には何もかかれていない石祠が入っている。おそらくどちらも道祖神社であろう。



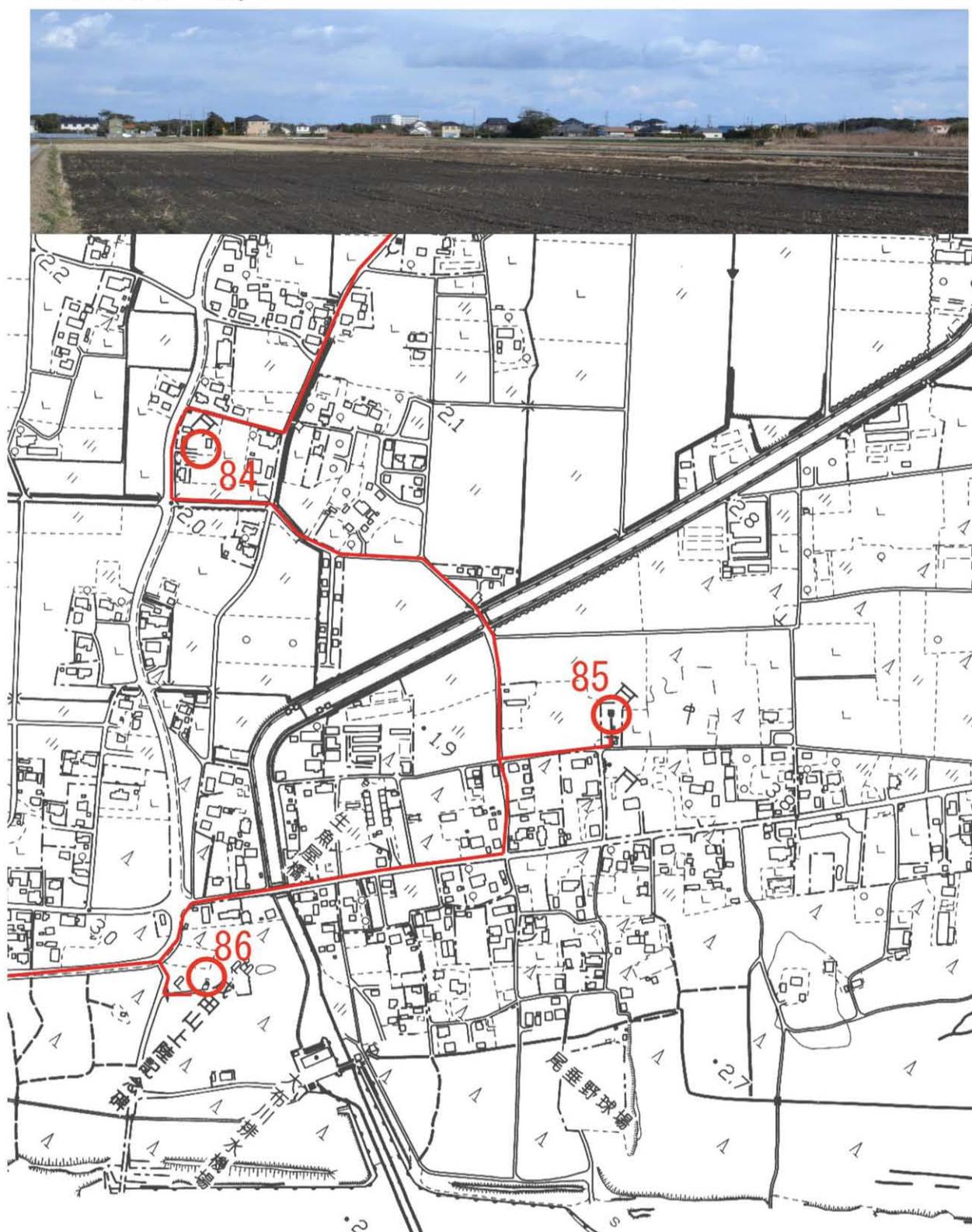
尾垂道祖神社



石祠の道祖神と地蔵

十一．尾垂イ・尾垂浜

尾垂の南部、あるいは尾垂浜(尾垂海岸)は尾垂イと呼ばれ、内陸部と分けられている。ここには匝瑳市との境を流れてくる大布川が太平洋に注ぎ、その河口部には成田山上陸記念碑が立っている。前にも述べたが、尾垂の地名は古く、平安時代中期、平将門の乱による成田山縁起に出てくる。この時の尾垂浜は栗山川左岸一帯であったろうと思われ、今日でこそ成田山上陸地の位置は分からないが、この辺りの浜から不動明王が外洋船から揚げられ、川船に移し替えられて栗山川を遡り、成田へ向かったと思われる。



85. 尾垂大杉神社

農免道路をさらに南へ行き、海岸道路に出たら左に曲がり、大布川を渡って、一つ内陸の裏道に入って東へ行くと、左側に大杉神社がある。こちらの方では大きい方の神社で、正面の本殿に、右側には護国神社の別社が立っている。また境内には石祠も2基立っている。大杉神社は茨城県稲敷市にある神社を本社とする社で、大己貴命(おおなむちのみこと)を祀る。あんば様とも呼ばれ、平安末に常陸坊海尊が大杉大明神の神威で奇跡を起こし、海尊の容貌が天狗に似ていたことから、その容姿は天狗となっている。本社のある所が霞ヶ浦に面しているところから、主に漁師の信仰を集めた事から、この地にも勧請されたものと思われる。



尾垂大杉神社



大杉神社脇の大師塔

86. 尾垂成田山上陸地

平安時代中期の承平五(935)年、将門の乱が起こり、これを鎮めるため、朝廷は寛朝僧正を遣わし、高雄山の不動明王を奉じ関東に下向し、尾垂浜から成田で平将門調伏をしたと言う。不動明王ははじめ外洋船で畿内から運ばれ、銚子から香取の海へ入ろうとしたが、犬吠崎から北上できず戻り、栗山川河口の尾垂浜で川舟に移し変え、栗山川を遡って成田近くまで運んだと思われる。途中篠本で一旦降ろし、篠本新善光寺でも調伏が行われたと言う。この不動明王が運ばれた途中には、今日

も不動明王像が分布するのは、その名残と思われる。現在、記念碑があるところが、必ずしも上陸地点とは限らないが、あくまで碑を建てたと所としてあり、銅造の不動明王像と記念碑が立っている。



尾垂浜の成田山上陸記念碑

十二. 白浜海岸(木戸浜)

九十九里浜のこの地域は、昔白浜村と呼ばれたところから白浜海岸とも呼ばれた。また古くは木戸と言われ、木戸浜とも呼ばれた。木戸とは城とか関所の出入り口を言い、九十九里浜沿いには本町と南に山武市木戸がある。その間には本町屋形があって、そこには江戸時代、網元の海保氏が居を構えていた。その海保氏の屋形を守るために、北と南に木戸を設けたのが始まりと言われている。

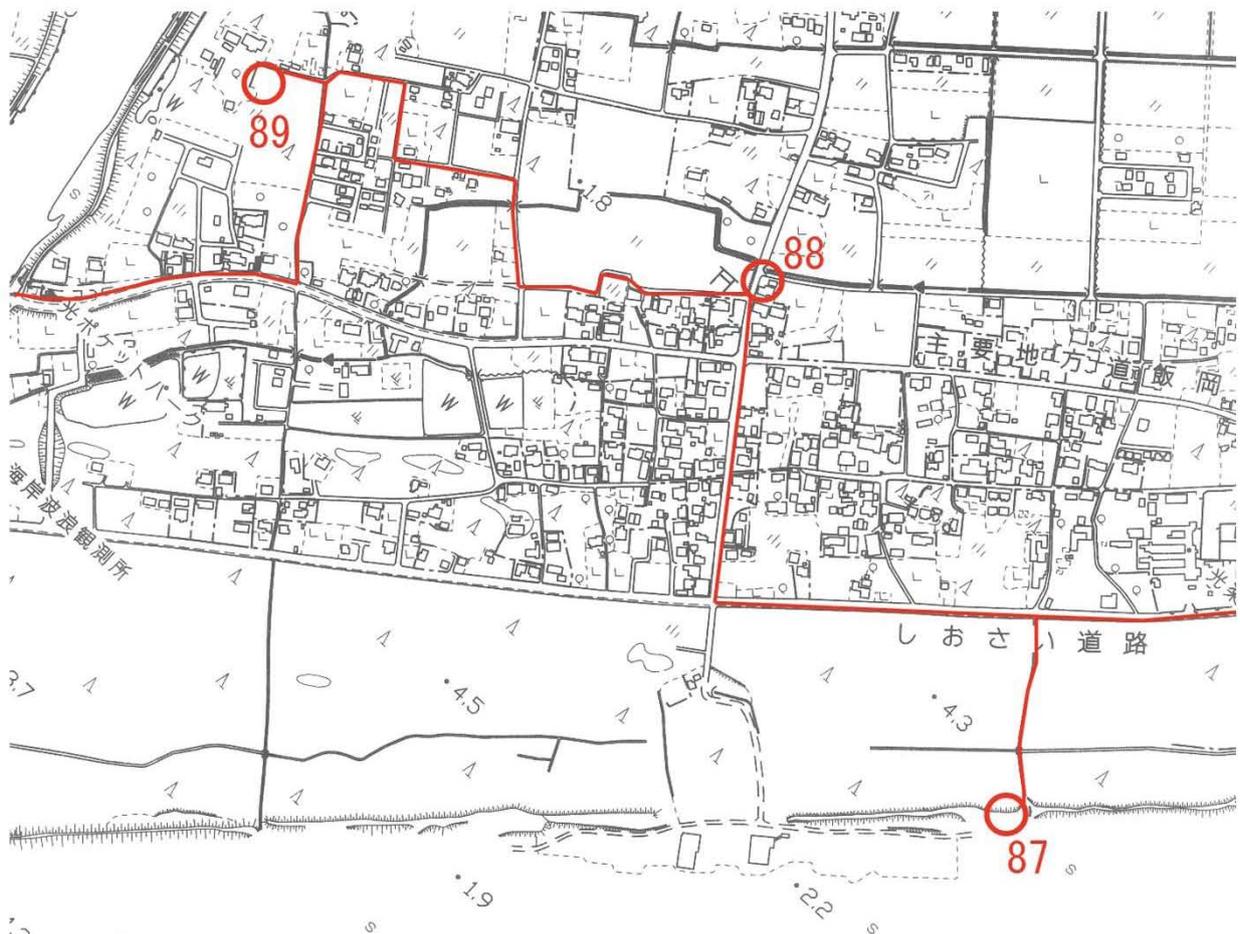
幕末にはここが佐倉藩領であったことから、幕命により海防のため、佐倉藩によって木戸陣屋が作られ、海岸警備に当たったと言われる。白浜海岸はかつては海水浴場として夏には賑わったが、近年の浜砂の流失により海水浴に適さなくなったため、海水浴場は閉鎖された。しかし、初夏には浜昼顔が咲き、また、海亀の産卵も見られ、新たな海岸公園としての魅力は失われていない。



浜昼顔の群落



赤海亀



87. 白浜庚申塚

成田山上陸地から海岸沿いのしおさい道路を西に行き、老人ホーム光楽園を過ぎた先に、左側に浜へ行く道が茂みの間にある。そこを歩いて茂みが開けて海岸砂丘の上に、こんもりとした小さな塚と脇に説明板が立っている。よく見るとこんもりとした中に小さな石塔があり、庚申と彫ってある。これが白浜の庚申塔である。この庚申塔は説明板によると、60年毎の庚申の年に動かすのだと言う。



白浜庚申塚

88. 白浜六割の大師塔

しおさい道路を西に行き、信号のある十字路が県道横芝停車場線との交差点で、そこを右に曲がり、県道飯岡一宮線との交差点を過ぎて、一つ目の右の角に、屋根の掛った四十五番の大師塔がある。



白浜六割の大師塔

89. 木戸陣屋跡

江戸時代の幕末のころ、太平洋岸には頻繁に外国船が現れ、開国を迫るようになった。それに対し幕府は海防を強化することに決し、この木戸にも佐倉藩に命じて海岸警備のため陣屋を設置することにした。これが木戸陣屋である。今は陣屋に勤務した藩士の子孫が住み、一部に土塁。堀らしいのが残り、陣屋の名残を示している。



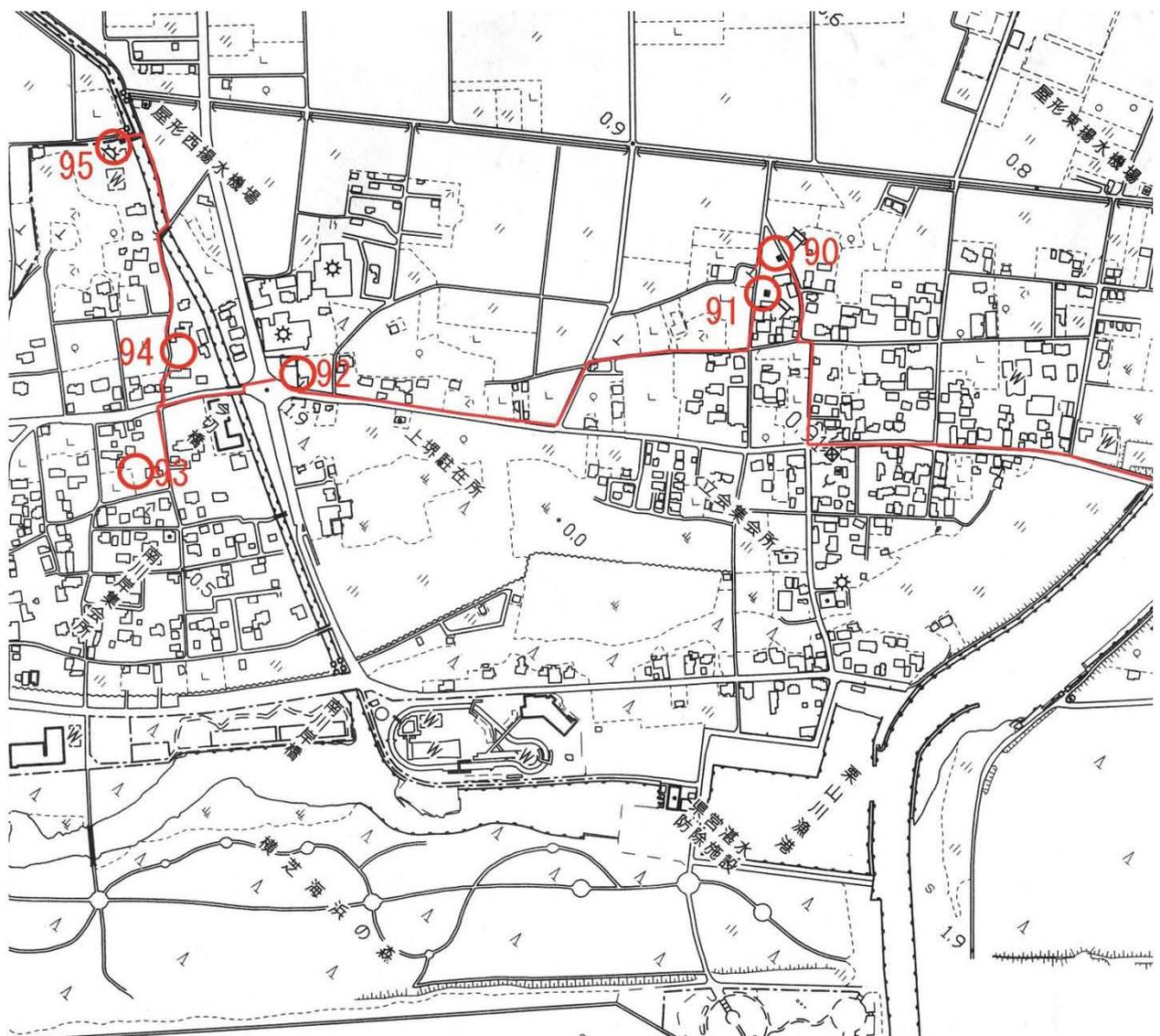
わずかに土塁状の高まりが残る木戸陣屋跡



木戸陣屋の棟札

十三. 屋形立会・南川岸

栗山川の屋形橋を渡ると、屋形の立会と南川岸である。屋形はこの最も海に近い海岸砂堤と、一つ内陸に入った砂堤との広い地域を含んでいて、海岸部を立会と南川岸との二つに分かれている。屋形海岸は今も夏には海水浴場として開放されているが、栗山川河口には以前はこどもの国のリゾート施設や栗山川漁港があったが、今は閉鎖されている。



90. 屋形立会の祠堂

栗山川の屋形橋を渡って西へ行き、三つ目の左角を曲がって入っていき、田んぼに出る手前の左側に鳥居が立っている祠堂がある。鳥居が立っているながら堂の中には3基の石塔が立っている。中央は青面金剛と三猿が彫られた庚申塔で、両側が勢至菩薩と観音菩薩が彫られた二十三夜塔である。



鳥居が立つ庚申様



祠の中は庚申塔と二十三夜塔

91. 屋形立会の八坂神社

祠堂を左に回りこむと、少し高くなった所に神社が鎮座する。この神社は八坂神社でこじんまりした社が小高い丘に立ち、脇には石祠の立っている。神社の前の田んぼの脇には小堂があり、その前には墓地と地蔵が立っている。小堂は大師堂である。



立会の八坂神社



八坂神社前の大師堂と地蔵

92. 屋形南川岸十字路の馬頭観音

八坂神社からまた県道に戻り、西に行くと南川岸の十字路に出、その手前のコンビニの前には屋根の架かった馬頭観音が立っている。この馬頭観音はいずれも文字塔で、造立は享保、明治25年、昭和14年で、かなり間隔をあけて立てたものである。



コンビニ前の馬頭観音

93. 屋形南川岸の竜神塔

十字路を渡って一つ目の左に入る道
を行き、またすぐ右に曲がると右側に
神社のような敷地があって、奥に屋根
のかかった石塔が2基立っている。一
つには「八大竜神宮」もう一つには
「謡竜神宮」と彫られた文字塔で、2基
の竜神塔である。竜神塔は町内ではこ
こにあるのみで、なぜここに竜神塔が
あるのかは、ここが海に近いというこ
とと関係があるだろう。



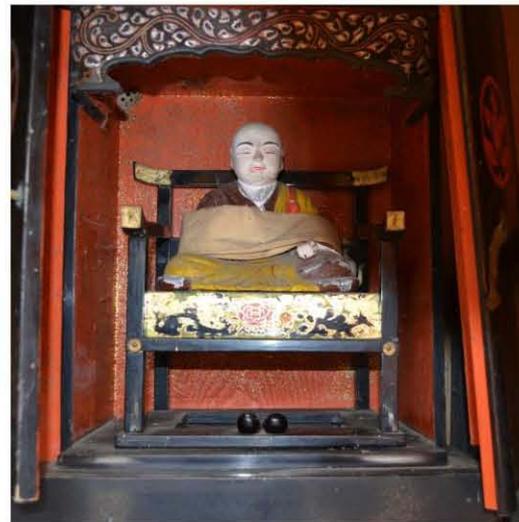
南川岸の竜神塔2基

94. 南川岸の大師堂

また、県道に戻ってこれを渡り、向
かいの小道を北へ行くと、すぐ右側に丹塗りの小さなお堂がある。大師堂
で、扉をあけるときれいな厨子に入った木造の大師像が安置されている。
栗山川の西側では、お大師様は石造でなく、多くはこのような木造の頂相
の様なお大師様が、大師堂に奉られている。



南川岸の大師堂



木造大師像

95. 屋形南川岸北の二十三夜塔

県道から北へ行き、南川岸の外れ
を左に曲がり、用水路を渡ると左側
に祠のような小堂があり、中に勢至
菩薩の容像を彫った二十三夜塔が2
基立っている。石塔は駒形と船形で、
後者の方は少し欠損している。この
石塔もなぜこんな外れに立ってい
るのだろうか。



南川岸北の二十三夜塔2基

96. 屋形南の西照寺

県道を北上し、十字路を過ぎて少し行くと、左側に新しい本堂を構えた清浄さを湛えたお寺がある。これは屋形南の西照寺で、天台宗の寺院である。門を入ると境内の左側には赤く塗られた小さなお堂があり、その右横には青面金剛の容像を彫った庚申塔が立っている。小堂に掛る扁額の文字は見えなくなっているが、おそらく大師堂かと思われる。



屋形南の西照寺



西照寺境内の庚申塔

西照寺を出てすぐ右側に、こんもりとした茂みがあり、中に空間があって中央に石祠がある。この石祠には何の神様を祀っているかは分からない。



茂みの中の石祠

97. 新島箕輪の地蔵堂

西照寺の前西へ歩き、突き当たりを右左に曲がりながら、集落の外れに出ると、角に小屋のようなお堂が立っている。中を覗くと石のお地蔵様が3基安置され、堂の前には道標らしき石塔、堂の横には馬頭観音が置かれている。このお堂の前の細道も、もとは街道筋であったろう。



新島箕輪の地蔵堂



地蔵堂の中



地蔵堂横の馬頭観音

98. 新島道貫の庚申塔

地蔵堂から前の墓地との間の道を北へ行き、県道に出る手前の左側の藪の手前に、庚申塔が立っている。薄暗い中にあり、気付かずに通り過ぎてしまいそうな石塔である。



新島茶畑の十九夜塔と石塔



新島道貫の庚申塔

99. 新島茶畑の十九夜塔

一旦県道に出てすぐ左に曲がる道を西に進み、水路に当たって橋のある所まで行くと、その先左側に十九夜塔と宝篋印塔の頂部と思われる石塔が立っている。ここの十九夜塔も水場の脇にあり、その謂れが想像される。

100. 新島本郷の二社神社

茶畑の十九夜塔から道を北に向け歩くと、新島の集落を繋ぐ道に当たる。それを左に曲がり行くと、右手に集落の並びの間に樹木が茂る所がある。そこが新島本郷の二社神社である。鳥居の奥にそこそこの大きさの社があり、この村の村社であろう。鳥居の左側には石塔が並んで立っていて、いずれも青面金剛の容像を彫った庚申塔で、6基がある。これほどの数が並んでいるのも変であるが、聞くところでは、元々栗山にあったものが、前の大戦中、栗山に飛行場が造られる時、廃棄されるを憚んで移転されたものもあるという。



新島本郷の二社神社



二社神社前の庚申塔

101. 新島本郷の光福寺

二社神社の道を挟んで西側に広場があり、右に集会所、その左に集会所のような光福寺の本堂がある。古い本堂ではなく、最近建て直されたお堂であるため、一見お寺のようではない。



新島本郷光福寺

102. 新島本郷の平和記念碑

光福寺の斜向にはまだ新しい石碑が立っている。大きな石碑は平和記念碑であるが、右端に小さな石碑に「大貫大尉戦死の碑」がある。ここでも大戦中航空戦があつて、ここで戦死された兵士がいたことを記している。栗山には戦時中、陸軍が本土防衛のため、戦争後期、飛行場が造られ、二式高等練習機が配備された。しかし、練習機と言えども、いざとなれば戦わなければならない。そういう時、来襲した米軍機を迎撃した機があつたという。けれどもむなしく撃たれ海岸に墜落したらしい。白浜の海岸には、後年、練習機の脚が揚げられ、それがほぼ事実であつたことが証明された。今もその機の脚は町で保存されている。



新島の平和の碑

103. 新島本郷光音寺

記念碑の前の道をさらに西へ行き、右に曲がる道を行くと奥の突き当たりに光音寺がある。お寺は本堂が敷地の中央に立ち、左には小さなお堂の大師堂があり、本堂の周りには墓地が並んでいる。お寺の入り口の右側には如意輪観音を彫った十九夜塔が2基立ち、そのほかは墓塔である。ほとんど人気がなく、集落の中の寺であるが、静かな佇まいである。



新島光音寺



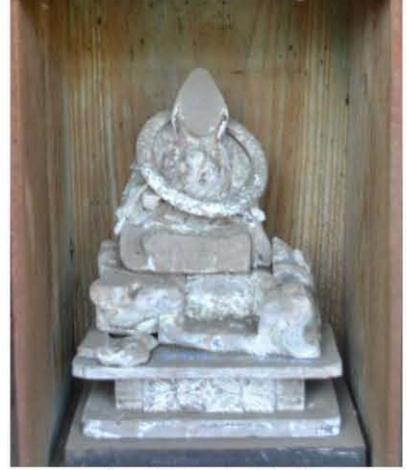
光音寺前の十九夜塔

104. 新島三島の薬王寺

光音寺から西に行き、十字路を右に曲がって農免道路を越えると三島である。三島に入って左に曲がり、次の十字路を右に曲がった突き当たりに薬王寺がある。山門を潜ると正面に小ぶりな方三間堂があり、右手に本堂がある。お堂は小ぶりであるが境内地は広く、その境内の左側には小さなお堂が3宇あり、大師堂、弁天堂、子安観音堂で、それぞれ木像が安置されている。特に弁天堂の周りは池が掘られている。



三島の薬王寺



木造子安観音



薬王寺境内西側の小堂群



木造弁財天



石造
大師



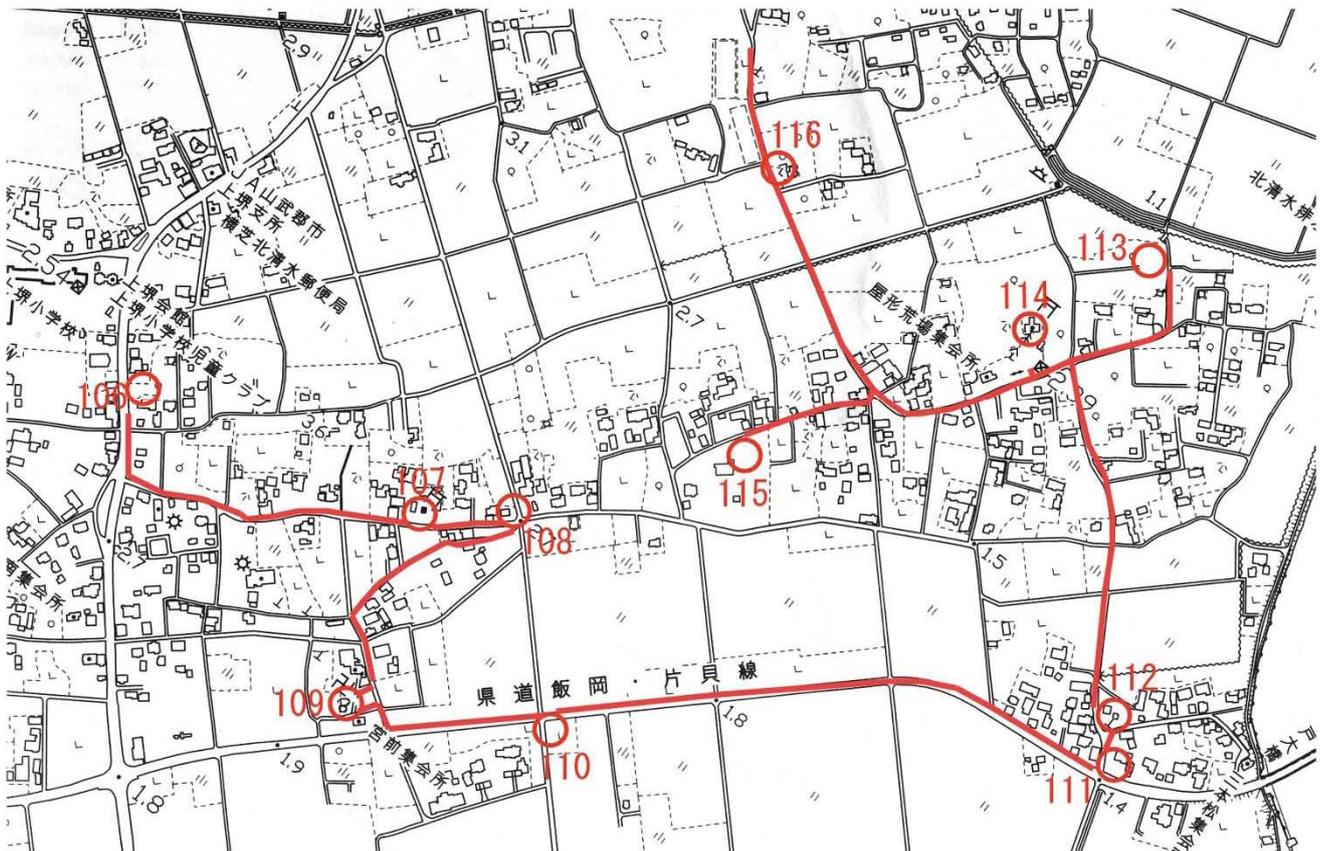
薬王寺横の二社神社

105. 新島三島の二社神社

薬王寺の右手奥には鳥居が立っていて、その奥に二社神社の社殿がある。

十五. 屋形宮前・荒場・三本松

屋形の内陸に入った二つ目の砂堤上に、屋形南、宮前荒場の集落があり、新島に隣接して栗山川まで長く続き、また、栗山川の縁に一つ海寄りにある小さな区域が三本松である。屋形の地名の由来は、平安時代中期、平良兼が居館を構えた所から付いたと言われ、世の場所が四社神社であると伝えられている。それを明かすように、四社神社の近くを昭和60年の発掘調査でその当時に当たる遺跡が見つかっている。ほかに江戸時代に伊能忠敬が天文観測をしたところとか、海保漁村が生まれた所とかの歴史的な史跡がある。



106. 海保漁村誕生の所

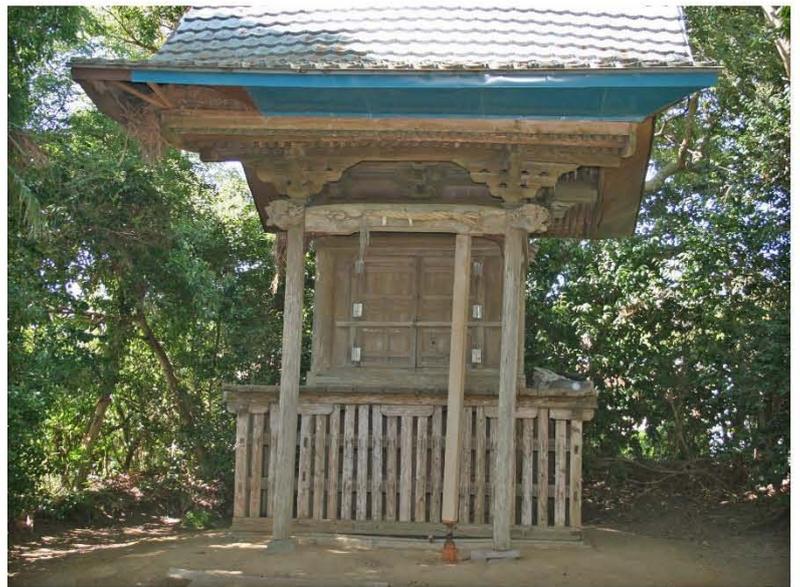
新島から集落の中の道に戻り、県道に出て上堺小学校の前を過ぎると、県道の東側に木立が茂る奥に石碑が立っている。ここが江戸時代末期の儒者海保漁村が生まれた所で、今はこの場所が県指定になっているが、前は隣の自転車屋さんが清掃していたが、現在は地元の海保漁村先生誕生地保存会によって整備されている。海保漁村は医者の子として寛政十(1798)年に生まれ、幼少より優れ、文政二(1819)年、成人して江戸に出、最初多紀桂山の内弟子、後に太田錦城に入門し、儒学を学んだ。やがて錦城の第一の門下となり、私塾掃葉軒を開き、弟子を指導した。門弟には鳩山和夫、渋沢栄一などがいて、明治の発展の原動力となった。



海保漁村誕生の處に立つ石碑

107. 屋形宮前愛宕神社

海保漁村の碑から少し南へ戻り、東へ行く道を行ってしばらく歩くと、左側にこんもりした中に神社がある。愛宕神社は京都嵯峨に本社があり、伊弉冉尊(いざなみのみこと)を主祭神とし、防火、火伏の御利益があると言われる。町内にはここのほかに、傍示戸と尾垂にある。



屋形宮前の愛宕神社本殿

108. 屋形宮前の庚申塔

愛宕神社からさらに東へ行くと十字路に当たり、その十字路の左手前には草に隠れるように小さな庚申塔が立っている。石塔は4基以上あり、中には三猿があつて上部が欠損してないものまである。今はほとんど省みられなくなっている様である。十字路の東側には石祠がある。



屋形宮前の庚申塔群

109. 屋形無量寺

十字路から戻るように南斜めに行く道を行き、突き当りを左に曲がり、県道に出る手前の右側にお寺がある。これが屋形無量寺で、天台宗寺院である。参道の右側には大師堂があり、その先に大きな宝篋印塔、そして町指定になっている六地蔵が立っている。町内の六地蔵の多くが破損しているのに対し、ここの六地蔵は良好な状態である。左側には観音堂、大師堂が並び、比較的大きなお寺である。



屋形宮前の無量寺門前



参道右側のお堂



参道左側の宝篋印塔と六地蔵

110. 屋形宮前の道標

無量寺から前の県道に出て東へ行くと、一つ目の十字路の南側に石塔が立っている。「東福岡、旭、銚子」「西成東、東金、東京」とあり、「千神」と言う字が見えるところから、明治以降、地元網元の海保家が立てたと思われる。



屋形宮前の道標

111. 屋形三本松の庚申塔

県道をさらに東へ進み、栗山川の土手の手前に集落があり、ここが三本松である。集落へ入る角には石塔が立ち、そこには庚申の文字が刻まれ、庚申塔であることが分る。



屋形三本松の庚申塔と石祠

112. 三本松お堂

庚申塔のある角を入ると、すぐ右側に墓地とお堂がある。お堂の中には木造お大師様が安置され、大師堂であることが分かる。境内地に入ると、の右側に如意輪観音を彫った十九夜塔、奥には馬乗馬頭観音が立っている。また、お堂の周りにはお墓があり、かつてはそこそこのお寺であったと思われる。



屋形三本松の大師堂



馬頭観音



十九夜塔

113. 屋形粉豆遺跡

三本松から北へ行き、先の十字路を右に曲がり、先を左に曲がると両側が草むらになり、その先を水田に出る。このあたりの砂地のところが粉豆遺跡で、昭和60年、発掘調査され、平安時代の製鉄跡と土器などが出土した。遺物の土器から10世紀頃と推定され、平良兼のいた時代とほぼ一致し、良兼がここに館を構えたことが想像される。



屋形粉豆遺跡



粉豆遺跡出土遺物

114. 屋形四社神社

十字路に戻り西に行くと、すぐ右側が四社神社である。大きな社殿と周りは鬱蒼とした神社杜に囲まれ、長い歴史を感じさせる。奥の本殿は町指定になり、その両側には雄雌の榊の木が植えられ、熊野神社の系統であることを示す。1月には岩戸系の十二社神楽が奉納され、併せて潮祭も行われ、多くの人々が集い、賑わう。この神社には、角のある獅子頭が3頭伝えられていて、半世紀前ほどまで近在に厄よけや病封じの祈祷で舞われていたと言う。これは三匹獅子舞で、角があるのは鹿で、本来東北から関東に残る鹿舞である。鹿舞は縄文時代から舞われていたとも言われ、赤い猿とともに狩猟の祈願に舞われる、古い名残の舞である。神社の前には庚申塚があり、庚申塔や石祠が立っている。



四社神社社殿



四社神社の里神楽



潮祭



三匹鹿頭と猿面



四社神社前の庚申塚

115. 伊能忠敬天文観測の所

四社神社から西へ行き、変形十字路を西へ向かうと、左側に空き地があって、伊能忠敬天文観測の所の碑が立っている。ここは江戸時代、屋形の網元屋敷があり、そこに伊能忠敬が全国測量の折、滞在して位置確認のため天文観測をした所と言われている。伊能忠敬が泊まったと言う屋敷は、町内でも有数の茅葺きの建物であったとされるが、10年ほど前、落雷による火災により、焼失した。



伊能忠敬天文観測の所

116. 屋形目篠の小堂

屋形の荒場から北へ行く道を進み、北清水に入る手前の右側に小堂が2宇立っている。ここはまだ屋形のうちで目篠というところであるが、北清水の集落に近い。堂の中には木造の大師像が安置され、もう一つの堂には観音像がある。堂の横には十九夜塔と首の取れた二十三夜塔とが置かれ、ここが信仰の場であったと思われる。



屋形目篠の小堂と石仏群



木造大師像



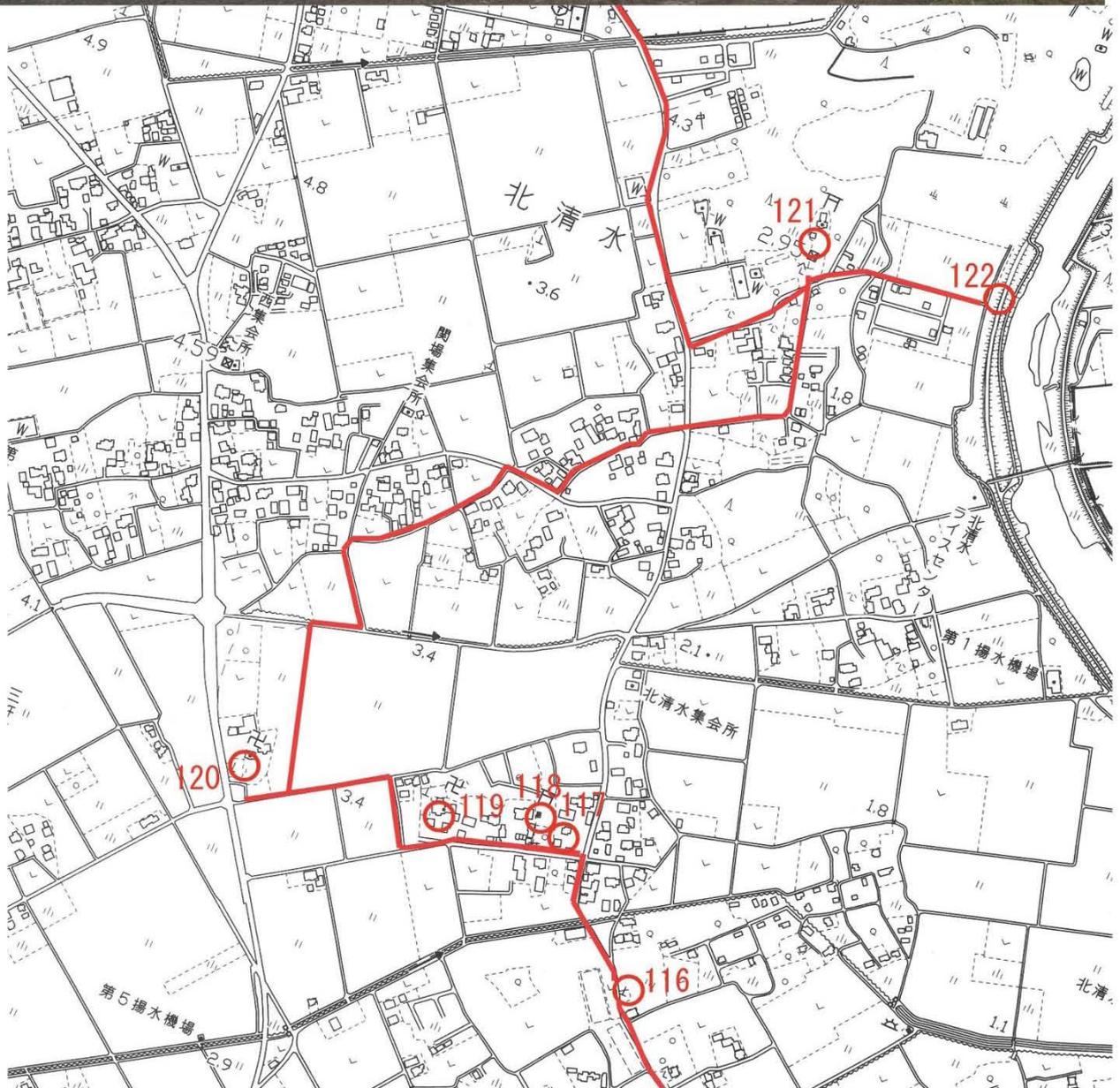
木造観音像



石仏群

十六. 北清水

北清水は屋形の北に位置し、2列の砂堤上にあるが、このあたりの砂堤は水田との高低差があまりなく、分りにくくなっている。それは堤のように細長くなってなく、島状に点在していて、その上に集落が分散していて、どこが集落の中心であるか分からないのと同じである。寺院は南部に2寺が、神社は村社と言える清水神社が北部に、いずれも集落から外れたところにあり、中心部には宗教的な集まる場所がない。



117. 北清水東里の道祖神

道をさらに北に進み、北清水の集落に入って最初の十字路を左に曲がるとすぐ右側に銅版葺きの小祠があり、中に石祠が安置されている。屋根のある祠に守られている道祖神も珍しい。



北清水東里の道祖神

118. 北清水東里の大杉神社

道祖神のすぐ先の右側に鳥居が立ち、その奥に大杉神社の小さな社殿がある。大杉神社は本社が茨城県稲敷市にあり、主に漁師が信仰する神様であるが、海岸から離れたここで大杉神社があるのか分らない。大杉神社は水難よけもあるので、栗山川との関係もあるかもしれない。社の前には十九夜塔や読誦塔などが立っている。



北清水東里の大杉神社



大杉神社前の石塔群

119. 北清水不動院

大杉神社からさらに西へ行くと、右側に御影石の標柱が立つ北清水不動院がある。北清水不動院は、横芝で唯一不動明王を安置しているが、天台宗の寺院である。正面奥に本堂が立ち、左側に方三間の不動堂がある。また、入り口の右側には、大師堂があり、このお寺も立派である。



北清水不動院



不動院の不動堂

120. 北清水延命寺

不動院の横を北へ曲がり、一筋北の道を西へ行き、県道に出る手前に延命寺がある。延命寺も天台宗の寺院で、最近建て替えられ、真新しい本堂はまだ木の香りがしてくる様である。お寺の入り口の右側には、拝観者を迎えるように、馬頭観音が立っている。



北清水延命寺

馬頭観音

121. 清水神社

延命寺からまた屋形からの道に戻り、さらに東に入ると清水神社の参道に当たる。参道を北へ行くと清水神社の鳥居が立ち、その奥に神社の社殿がある。神社は周りを杜に囲まれ、静寂であるが、常に清掃されている様で、清浄さが保たれている。社殿の前には狛犬が2対あり、時を変えて奉



清水神社正面



清水神社参道脇の小祠



清水神社入口の庚申塔

納されたものであろう。鳥居を潜ったすぐ両側には小祠があり、子安様などが祀られ、また、左側には庚申塔が2基立っている。

122. 北清水栗山川土手上の十九夜塔

清水神社の前から右へ行って、栗山川の土手に上がると、すぐ左手に十九夜塔が2基並んで立っている。塔は川を向き、川に流した霊を悼んでいる様である。



北清水栗山川土手上の十九夜塔

122. 栗山平和公園

北清水の旧道が県道に出る一本手前の右へ行く道に入り、少し行くと右に横芝敬愛高等学校があり、それを過ぎると栗山平和公園がある。公園の中央には飛行機をデザインした彫刻のあるメモリアルモニュメントがあり、ここが過去に軍の飛行場があったことを示している。ここにあった栗山飛行場は、本土防衛のため九十九里平野に数箇所作られた軍用飛行場の一つで、機能はあまり重要ではなく、1,400mある滑走路は舗装されてなく、配属された機は二式高等練習機であったと言う。それでも米軍機が来襲したときは、これで迎撃したと言う。ここにも戦争の悲劇の場があったことを忘れない様、これからの平和の願いを込めて造られたのがこの平和公園である。



栗山平和公園



栗山飛行場の範囲(緑色線、青色線は滑走路部分)



今は県道となっている滑走路跡

十七. 鳥喰

鳥喰は南から鳥喰下、鳥喰上、鳥喰新田の大きく3地区からなり、下と上は東西に細長く砂堤上に集落が連なっている。新田はかつて鳥喰には鳥喰沼と呼ばれた湿地が総武線の南に広がっていて、それを江戸時代から干拓し耕地化した所を言う。この鳥喰沼の干拓のため、水を抜く水路が何本も掘られ、今も排水と田植え時は用水路として使われているが、このうち1号線水路は平行する道路拡幅のため暗渠化され、桜並木と共に消えた。鳥喰も砂堤と水田との高さの差はあまりなく、集落と山林があることによって砂堤が分り、また水田の中に小さく島状になっている高まりや畑地も砂堤で、ここは幾筋もの砂堤があることが分る。



123. 鳥喰南表の馬頭観音

北清水から鳥喰を通る県道を北へ来て、左側にあるトーカーンの工場の北側をに入って、田んぼと畑の中の道を西に進み、右手に墓地があるとその西側前に、馬頭観音が立っている。この前の道の北には、鳥喰下の集落の中に鳥居が見える。おそらくこの道が古くからある道筋なのであろう。



南表の馬頭観音

124. 鳥喰伏木田の石塔群

馬頭観音の前から道を南に行き、一つ目を右に曲がって西に進み、道が左に曲がる所に石塔が何基か立っている。一番手前には粘板岩製の石塔に、庚申大明神と字が彫られ、その後に半ば埋まった青面金剛像の庚申塔がある。また後方には如意輪観音像を彫った十九夜塔が立っている。近くには水路があり、ここも古い道筋であったろう。



庚申文字塔



半ば埋もれた庚申塔



十九夜塔

125. 鳥喰下の大神楽

鳥喰伏木田の庚申塔から少し戻って北へ進み、集落前の道に出る所に鳥喰下の集会所がある。この集会所で正月奉射の日に、神楽の獅子舞が舞われていたが、近年演じ手の高齢化により、それができなくなっている。



鳥喰下大神楽の獅子舞

126. 鳥喰下の鳥居

鳥喰下の集落のほぼ中央に、道を跨ぐ様に赤い鳥居が立っている。しかし、近くに神社はない。地元の方に聞くとこの鳥居は、鳥喰上にある熊野神社のものだと言う。つまり、この鳥居からまっすぐ熊野神社に向かって参道がかつてはあって、その名残である。参道は耕地整理によってこれから北は今はない。南へは先の馬頭観音の前を通過して、新島まで続いている。



鳥喰下の鳥居、この先に熊野神社がある

127. 鳥喰下の真福寺

鳥居前から西へ集落の中の道を行き、突き当りをさらに右に曲がって薄暗い藪の中を行くと、右側に真福寺と言うお寺がある。と言っても本堂は民家風で、手前には大師堂があり、奥に墓石や小さい祠がある。ここには江戸時代、私塾を開いて学問を教えていた市原忠右衛門の墓碑がある。



真福寺の大師堂



大師堂の石造大師 市原忠右衛門の墓碑

128. 鳥喰下の八幡神社

真福寺からさらに西へ行くと、正面に大樹に囲まれた小さな社を構えた神社がある。南に向いたこの社は、鳥喰下の八幡神社で、ここはもう集落の西外れに当たる。



鳥喰下の八幡神社

129. 鳥喰上の熊野神社

鳥喰下から一つ北の集落へ行くと、特にこんもりとした社がある。ここが熊野神社の森である。正面は南側にあり、拝殿とその奥に本殿があり、このあたりでは大きな神社である。

熊野神社社殿の右横には小さな社が2社並んで鎮座し、左は子安大明神、右は愛宕神が、祀られている。子安大明神は木造の神像が本殿の中に、愛宕神は五輪塔の空輪が置かれている。



鳥喰熊野神社



熊野神社社殿横の小祠



木造子安大明神



小祠の中の五輪塔

130. 鳥喰上の普門院

熊野神社から道を挟んで北側に、少し入ったところに普門院がある。ここに中世の居館があったと言われるが、堀、土塁などの遺構は分らない。



鳥喰普門院

131. 鳥喰新田の稲荷神社

普門院から前の道を東に行くと、水路を交えた変則十字路に当たる。その十字路の先の左側に鳥喰上の集会所があり、その前に地蔵堂と小祠が並び、集会所の東側に鳥居が立ち、その奥に稲荷神社の社がある。地蔵堂には布を掛けられた2体の石造地蔵が、稲荷神社横の小祠には石造子安大明神が鎮座する。



鳥喰新田稲荷神社



鳥喰新田集会所横の小堂と小祠



子安大明神



地蔵2体

132. 鳥喰新田の成就寺

稲荷神社の横に小道があり、その道の奥に成就寺がある。本堂はあるが、無住となっていて、たまに近所の檀家の方が草取りをしているようだ。寺の入口には地蔵や如意輪観音の石塔が壊れて転がり、境内の北西隅には如意輪観音を彫った十九夜塔が立っている。また、本堂の周りには無縫塔や容像を彫った、古い墓塔が整理されて並んで立っている。



鳥喰新田成就寺



十九夜塔

133. 鳥喰新田の大六天神社

成就寺から北へしばらく行くと、右側に鳥居が立っていて、きれいに清掃された境内の中に社殿が立っている。大六天神社と呼ばれる。社殿の後ろには、右に青面金剛の像容を彫った庚申塔が2基立ち、左には小祠があり、中には鏡のご神体が祀られている。



鳥喰新田大六天神社



大六天神社裏の小祠



大六天裏の庚申塔

134. 栗山沢山の十九夜塔

鳥喰新田の大六天神社から東へ進み、水路沿いに行き、水田の中の新しい道に出会うと、道の東側で水路南側にコンクリート板に護られた十九夜塔がある。



栗山沢山の十九夜塔

135. 栗山吉祥院

沢山の十九夜塔からさらに水路に沿って東へ行き、住宅地に入る手前を右に曲がり、一筋南の道を左に日曲がり、住宅地の中を歩いていくと栗山の共同利用施設があり、その斜向かいに吉祥院のお堂が見える。周りを墓地に囲まれた方三間堂であるが、堂の中は空っぽである。共同利用施設の敷地内には、古い墓石が並べられ、また、大師堂もあり、元々吉祥院は大きなお寺であったと思われる。



大師堂の中の大師



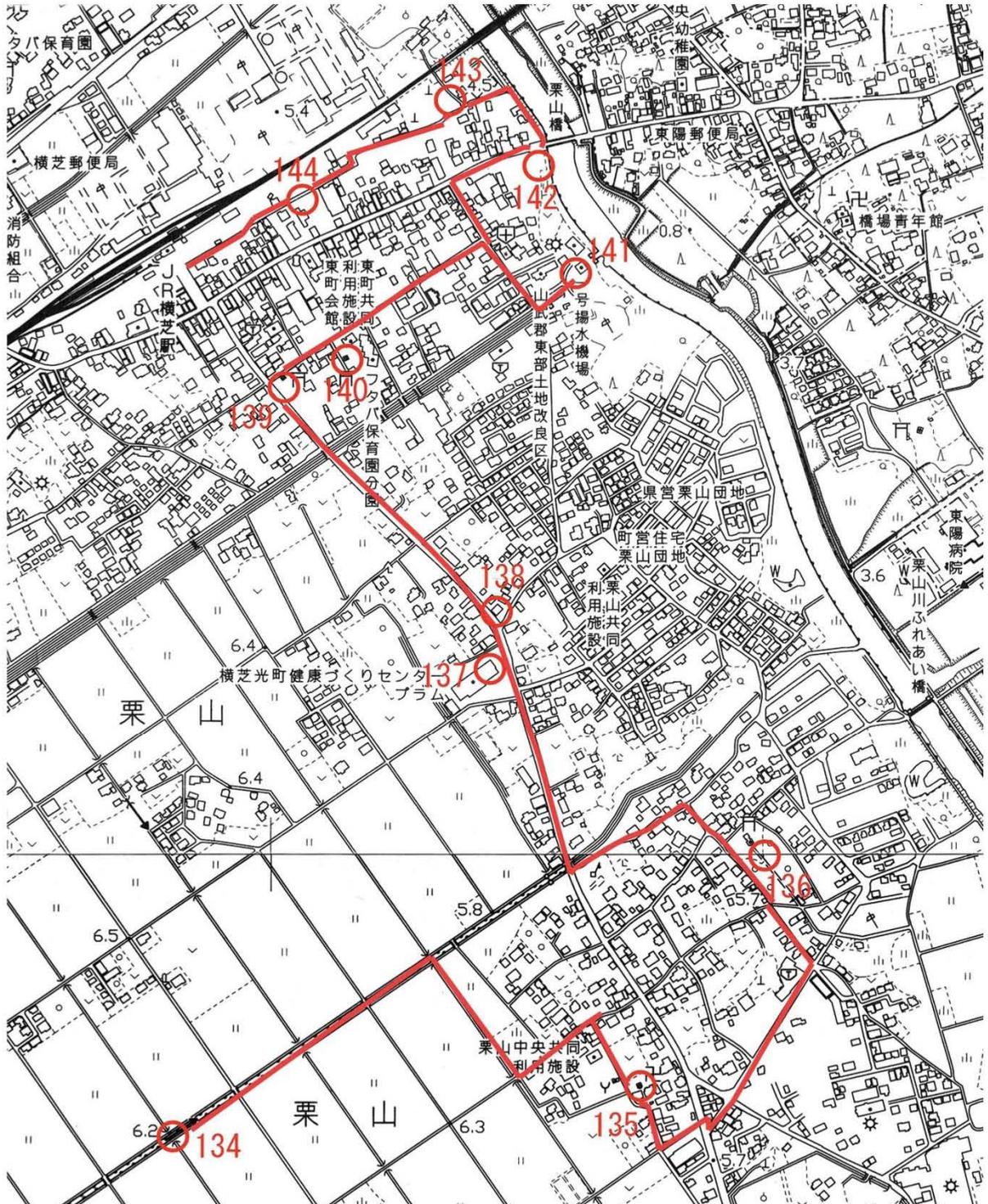
集会所前的大師堂



吉祥院本堂

十八. 栗山・東町

栗山は、北は横芝駅前の東町の南から、南は北清水までの広い範囲を指し、南北に走る県道沿いに住宅地が分布し、その西側には水田が広がっている。また、南部は戦前には陸軍の飛行場が造成され、環境が一変した。戦後は跡地が一時期通信所として利用されたが、まもなく民間に払い下げられ、宅地や工場用地になった。今では飛行場の名残は直線道路と平和公園があるのみで、水田の中にあったという掩体壕はない。栗山は古代武射郡畦代(足代)郷に比定され、健康福祉センターが建設される際の発掘調査で平安時代の遺構が出ているが、畦代郷を示す資料は出なかった。東町は江戸時代には街道が通り、栗山川近くから海に向かう道があったが、町並みはあまり無かったようで、それができたのは総武鉄道が敷かれ、横芝駅ができてからであった。



鳥喰から栗山、東町を貫いて通っていた1号線水路は、平行して走る道路の交通対策のため、平成20年から暗渠化工事が始められ、今は水の流れも桜並木も見られなくなり、町民の憩いの場であった風景は一変してしまった。



136. 栗山鹿島神社

かつての1号線水路と桜並木(市原恒氏撮影)

吉祥院から県道に出て、ふれあい橋に行く道を行き、途中で左に入る小道を行くと鹿島神社を護る杜がある。鹿島神社は栗山の郷社として、周辺の氏子から信仰を集め、境内はいつもきれいに清められている。神社の南には八坂神社、子安神社の小さな社があり、また、杜の中には馬頭観音がある。



栗山鹿島神社



馬頭観音



子安大明神

138. 栗山庚申(塚)遺跡

また、県道に出て駅に向かって行くと、左側に町の健康福祉センターの建物が見えてくる。同センターが立てられる時の発掘調査では、奈良・平安時代の畑跡が検出されたが、古代武射郡畦代郷を示す資料は出なかった。



発掘された庚申遺跡



庚申遺跡からの出土遺物

139. 栗山庚申塚

健康福祉センターの斜向かいの道
辺には、石碑などが立っている一角
がある。今は周りをコンクリートで
固められ、中央に青面金剛の像容を
彫った庚申塔が2基立っているほか、
手前には記念碑、後ろには読誦塔な
どが立つ庚申塚である。



健康福祉センター前の庚申塚



東町の大師堂

140. 東町の大師堂

県道を駅に向かってきて、駅前
十字路の手前 100mほどの所に横
に入る小道があり、その右角に鳥
居、石碑と共に小さなお堂が立っ
ている一角がある。どれも皆古く
なく、昭和に入って立てられたも
のようである。



小堂の中の石造大師像



十一面千手観音



読誦塔

141. 東町豊川稲荷神社

東町大師堂横の小道を歩いていくと、
右側にこれも新しそうな神社の建物
が立っている。これは愛知県の豊川稲荷
を勧請した神社で、昭和 45 年に遷宮
されたと記され現在に至る。明治の地
図には無いことから、新しい神社であ
る。おそらく東町商店街の繁栄ととも
に、建てられた神社であろう。



東町の豊川稲荷神社

142. 1号線水路揚水機場

稲荷神社前の道を東に行くと突き当たり、右に曲がって少し行くと旧1号線水路跡に出て、その左に栗山川との接点である機場がある。明治44年、鳥喰沼干拓と横芝・松尾・大平・上堺の用水確保のため、ここに用排水機場が作られた。その時の揚水機は蒸気機関で動き、昭和2年に電動に改修され、最近まで使われていた。



今の栗山川口の1号線揚水機場

143. 東町栗山橋袂の庚申塔

1号線機場から戻って、北へ行くと旧街道に出る。それを右に曲がるとすぐ栗山川にかかる橋があり、橋の手前右奥に青面金剛の像容を彫った庚申塔がある。橋は今は新しくなり、川幅も広げられたが、かつては橋の袂の北側に庚申塔が立っていた。この庚申塔は東町の守り神としてここに立てられたのであろう。



移設前の栗山橋袂の庚申塔



成蹊学舎設立
伊藤栄次郎顕彰碑

144. 成蹊学舎の碑

橋の手前土手道を北へ行き、また左に曲がると右側に墓地があり、その墓地の中に東町にあった私立学校成蹊学舎の碑が立っている。成蹊学舎は明治26年伊藤栄次郎が設立した学校で、後の横芝敬愛高等学校の元となった。



東町喜志台の石塔

145. 東町の石塔

成蹊学舎碑のある墓地前の道を駅に向かっていくと、左側に広い駐車場があり、道脇のその隅に石塔が2基立っている。そのうちの1基は稲荷大明神と彫られ、大きいもう1基は読誦塔である。

おわりに

ようやくこのガイドブックをまとめることが出来ました。このガイドブックを企画し、書き始めて3年近くになります。このガイドブックの目的は、町の文化遺産(今後も残されるべき文化)を網羅し、それを紹介し、また多くの方に観ていただくこととしました。そのため、掲載の文化遺産の所在を明らかにし、歩いて行ける様に地図に導線を引きながら示しました。そのための下準備として、町文化財審議会委員、町歴史ロマン研究会会員、生涯学習講座郷土を知る再発見の旅参加者、そのほか多くの方のご協力を賜り、その膨大な情報をまとめて、この3冊にまとめました。目を世に広げると、世界遺産だとか日本遺産だとかでもてはやされ、観光開発され、あげくは文化(自然)遺産そのものが破壊されて行く様が見受けられます。このガイドブックをまとめている間にも、消えて行った文化遺産があります。ここに紹介した文化遺産を町民皆さんが見守り、大事にして、後世に残されれば幸いと思います。

最後ですがこのガイドブックを作るに当たってご協力頂きました方の名前を記して、御礼と致します。(敬称略、複数所属の方は後略)

横芝光町文化財審議会(平成28年度)

西山太郎、橋浦芳郎、神保誠、土屋敏彦、海保教之、押尾正康、福元省藏、高久昌子、吉岡元子

横芝光町歴史ロマン研究会(故人含む)

穴澤治代、池田勝子、市原勝、伊藤嘉映、鶴之沢正夫、大胡博子、大胡正寿、小椋幸枝、加藤スミ、加藤松男、五木田英雄、越川毅、小西正男、齋藤しげ子、椎名聰子、實川恵美子、鈴木範子、鈴木益郎、高杉忠義、土屋敦、野村加津子、野村俊二、林淳子、福元アイ子、布施隆吉、布施久子、樋口広三、長嶋千代美、道澤道子、吉田茂、池田逸子、伊藤公男

生涯学習講座郷土を知る再発見の旅受講生

岩井節子、布施たき、鶴沢琴子、星野美佐枝、青木佐保子、木内百代、土屋幸枝、林慶子、宇野弘子、本田千津子

若梅健司、齋藤雄厚、深田隆明、宮内敏彦(故人)、久保田剛士、半田照善、大津頼政、塚本是順、五木田廣嚴、久野一郎、早川正司、鶴之沢康雄、福原貞夫、玉井ゆかり、小杉秀文、菅沢芳男、浜名徳順

千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県教育振興財団、鬼来迎保存会、中台神楽保存会、宮内神楽保存会、鳥喰下大神楽保存会、屋形四社神社里神楽保存会、

芝山町立古墳はにわ博物館、房総石造文化財研究会、横芝写真クラブ

本書の執筆、編集は、横芝光町教育委員会社会文化課文化財担当道澤明があたった。内容についての文責は道澤に帰す。

横芝光町の文化遺産ガイド3

発行日 平成29年3月31日

発行 横芝光町教育委員会

編集 横芝光町教育委員会

社会文化課生涯学習班文化財担当

印刷

